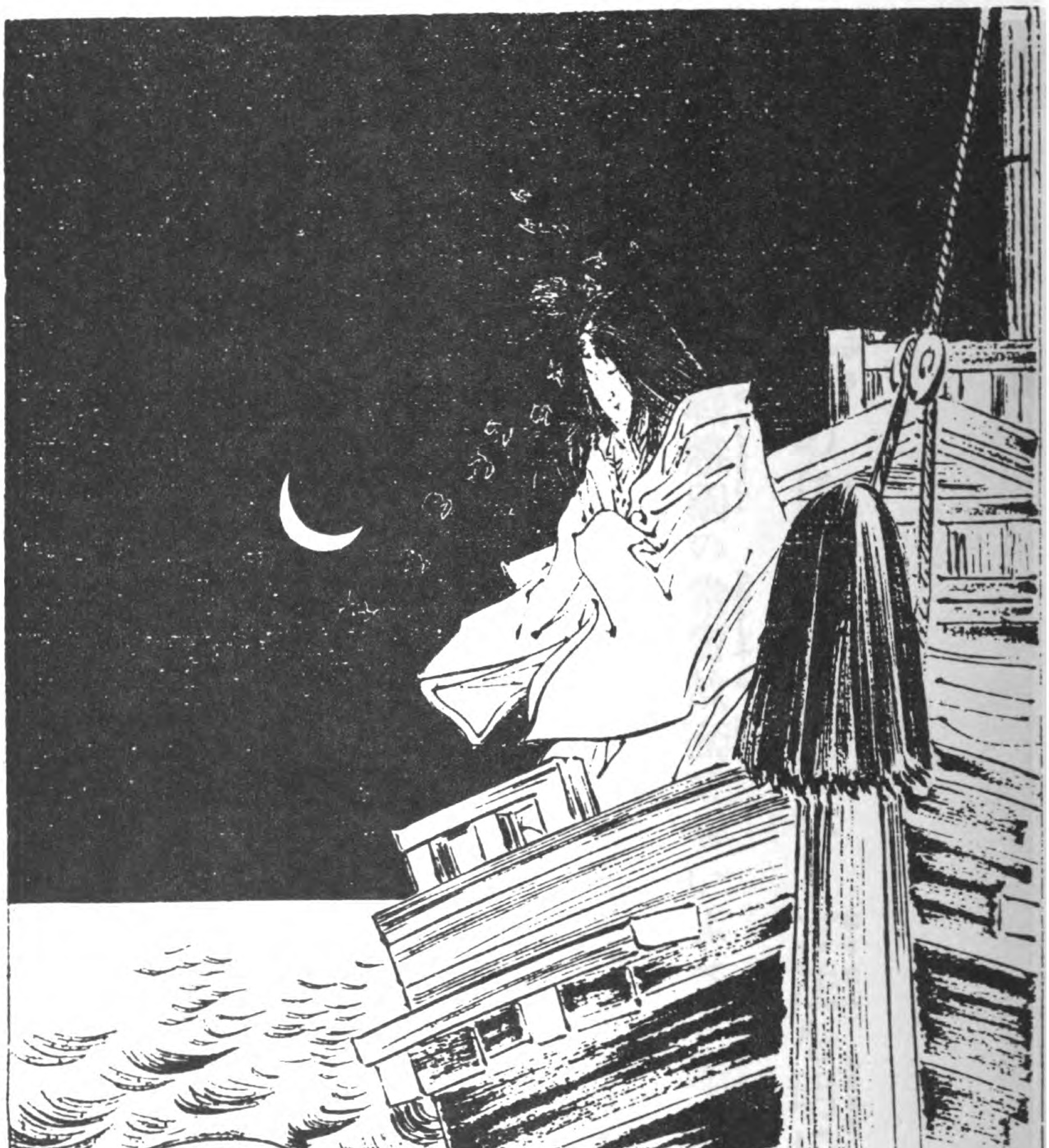


明治二十八年五月五日發兌
女鑑
第八十五號
東京國光社

女鑑第八十五號目次

小宰相



婦人の任務及其の任務を完うすべき方法を明にす（上）

婦人、戰後の任務として、戰勝國の常習故套ともいふべき惡疫傳播、風紀紊亂等のこと、未然の今日、あらかじめ、ふかく注意して、その防遏の方を講じ、時におよびて、かへりみて、その用心の篤からざりしを悔ゆといふが如き憂なからんことを計れかしとは、吾人の、本誌第八十三號まて切言したるところなり。おもふに、大方の婦人諸子は、早に讀みて、これを知り、而して、首肯せられたるならん。されは、吾人は、婦人諸子が、あつく、本誌を眷顧せらるゝ盛意を多とするとともに、更に、歩數歩を進めて、前論の餘意を承け、戰勝國

としての婦人諸子は、將に、如何の方法を以て、その任務にしたがひて、而して、その天職本分を全うせらるべきかといふことを明にせんとす。

さて、吾人は、注意のため、事要を理會せらるゝに便にせんため、議論の目をわかちて、七項とし、

（い）衛生上の事務

（ろ）敎育上の事務

（は）經濟上の事務

（に）交際上の事務

（ほ）風俗上の事務

（へ）道德上の事務

(と) 國體、及、國風

次を逐ひて論ずること、左の如けん。

(い) 衛生上の事務

およそは、第八十三號に、已にいへる如く、戰後、衛生事務の必要、かつ、頻煩を致すこと、古來、各國の例として、珍しからぬ事項なりとす。たとへば、清佛の安南戰爭、英佛共同のエジプト攻擊、獨人、佛人ゟ克ち、魯國、土國を敗り、或は、英國、印度を平げ、佛國、スーダンを討ち、如くは、英佛聯盟、清國を攻略し、乃至、我が國、臺灣、および、西南事件に於ける類、一々述べて、仔細にいはゞ、殆、際限なかるべし。蓋、これ、みな、史紀ゟ記し、口碑に傳へ、或は、婦人諸子の、實際、目ゟ睹、耳に聞き、あたしく、驗知せらるゝと

ころなり。就中、我が西南戰後、長崎地方に發生せしコレラ病にいたりては、その毒、ことに、猛烈にして、到る處、猖獗をたくましうし、漸々、內地に傳播して、つひに、全國の廣きにおよび、各地一般、處として、その禍を被らざるなく、慘憺たる光景、人をして、轉、酸鼻にたへず、今に、思ひて、悚然股栗、膽、また、寒きをおぼえしむるは、現に、我、人、實驗して、少間もわするゝことなく、つねに、憎みて、また憎み、厭ひて、また厭ふべきことゝす。それ、劇毒のおよぶ所、不潔の地のみといふことなし。卑賤人にかぎるにあらず。此を以て、名士、偉人、君子、英雄、貴族、權門、大家、豪戶、姓の新舊となく、齡の少長となく、美醜となく、智愚となく、之がためには、花の、夜半の嵐に散り行くが如く、露の、朝の日影に消え失するが如く、二なき玉の緒、永く絕

えて、また結ぶに由なきに至らんとす。實に、果敢なきは、生命にて、うたてきは、疾病にこそあれ。

あはれ、人のすぐれて、いとほし、かなしとするは、父母なり。兒孫なり。兄弟姉妹なり。父母、兒孫、兄弟姉妹を、誠心に、いとほし、かなしと思はん人は、衛生攝養、十分、意を用ゐ、あくまで、衷を傾けて、等閑なることあるべからず。近く喩ふれば、內外の掃除、飲食、衣服の注意等は、かならず、自身、率先して、模範を示し、如くは、みづから、分別して、疎漏なきを主とすべし。萬事、奴婢にのみ一任じて、盡すべき職責をつくさず、或は、褥上、烟草を喫し、居ながら、人を頤使するなどの風習は、嚴に禁せざるべからず。すべて、衛生の令、あつく、これを體し、清潔存養の二事、つねに、念頭におき、何事

も、おのれ、先、これを爲す覺悟なくば、惡疾傳播の洪害を防がんこと、到底、望むべからざるなり。

論説

家庭に處しての務

岩下方平

人生の快樂は、夫婦相愛、家門繁榮より大なるはなかるべし。而るに、その相愛といひ、繁榮といふ本は、畢竟、婦女たるものゝ品行如何に存すること、余の喋々を俟たざるなり。

そもそも然らば、婦女の要、第一、家庭に在るの方りて、十分に、敎育を受け、其の智識をひらくと同時に、其の德性を涵養し、以て、他年、人に嫁ぎて、家

を治むるに適すべき基礎を立てずして可ならんや。

基礎を立つること、止むべからず。隨ひて、教育のこと、ひとり、學校にのみ一任して、已は、曾て顧みず、關せざるものゝ如く、或は、また、全く、知らざるものゝ如きこと、かならず、其の父兄たる者として、之あるを許さゞるべし。

學校は、子女教育の場にして、倫理を明にし、名教を正すも、また、一の學科に屬す。教師をして、正實の士ならしめば、其の感化薫陶のおよぶところ、應に、大なるものありぬべし。されども、其の家族、不幸にして、學校教育の、はなはだ貴く、はなはだ重しといふことをわきまへず、何時も、子女を藐視して、いつまでも、幼稚と見做し、適當の躾、示も怠りて、これを與へず、眞に、全

く、子女をして、愚ならしむるに至りては、たとひ、學校提撕の効、鮮少にあらずといふとも、又、はなはだ、利なく、益なきこと明けし。家庭は、學校と、相須ちて、發揮掩映するを要するなり。家庭の事情、學校教育の旨にかなはず、其の、あたら、學びて習ふところの嘉言善行、かへりて、家族固陋の惡習、放逸邪慳の弊風等に沮められ、平生の勉勵、更におぎなひなく、長じて、人の婦と爲るにおよびても、依然として、故態を存し、曾て、家に在りて、菓子を乞ひ、錢を弄びし際の如く、居常無賴、身修まらず、晏眠して、饗婦を頤使し、美衣盛膳、みだりに、みづから厚くして、而して、夫に仕へ、舅姑に奉ずるさま、殆、他人を待つが如く、子女教誨の要務にいたりては、なほ、已が、家庭に於いて、曾て、經驗したるが如く、おなじく、一擲して、不問に附し、其の、また、他

日、人に適きてのち、最、たふとく、最、須要なる基礎、捨てゝ立てず、度外にするにいたりては、其の弊害、私におゝふに、いふに耐へざるもののあるべきなり。

余、あまねく、世上の風を視るゝ、前にいふところの弊風惡俗、大抵、滔々として、皆、是なり。いやしくも、注意猛省して、すみやかに、良圖を定め、以て、急に、此の弊を一掃するまあらずは、其の國家の風俗上、尠少ならざる失損あること、明白にして疑なし。

此の失損まして、これを除きて、而して後、人生第一快樂のこと、夫婦相愛、家門繁榮といふもの、徐々として行はれ、漸々として盛ならん。而して、此の事の盛なる、以て、國家を作すに足らん。

是に由りて、之を見れば、婦人、家庭に處しての要務は、其の子女をして、素あらしめ、以て、他年、人に適きて、十分、婦道をつくすに足るべき基礎を立てしめずばあるべからず。其の方法何如といふことは、茲にいはず、且、かへりて、世上の識者に問はんとす。

女子の手跡及書簡に就きて

坂本三七郎

女鑑讀者の諸孃は、おほく、演劇を好むならん。吾人、曾て、好劇家に聞くところを以て、諸孃に告げ、かつ、之に因りて、手跡、および、書簡の事を述べて、一考を乞はんとす。古より、都下の所謂、檜舞臺に登り、一場千金の劇を演せんとする諸優は、其の女性に扮せる者、啻に、其の女性に扮する時のみに

於いて、紅裳緑衣を裝ふにあらずして、其の容貌、女性に適すると認むる時は、二三歳より、之をして、女裝たらしめ、起居、動作、進退、一に、女流の作法を取らしめ、其の遊戯の事も、毬を弄び、羽子を飛ばし、遊ぶところの友は、東家、西屋の阿孃なりと。是に於いてか、習ふところ、性をなし、終に、一點、男子の殺伐武骨の風なし。此の如く、慣はしむること十餘年。起ちて、場に登り、技を演ず。故に、其の態度、其の妙技、人をして、其の男子たるを忘れしめて、感極まりて、泣かしむるに至る。世、之を稱して、女役者と云ふ。吾人は、之を聞きて、彼の梨園社會の、技藝に鍛錬にして、其の心を用ゐることの深きを感ぜり。習久しければ、第二の性となり、其の性、發して、容貌、言語、皆然らざるはなし。愛すべきも、慣習なり。恐るべきも、亦、慣習なり。之が

ために、毎々、吾人が、書を、女鑑に投じて、孃等が、或は、已の身に、或は、其の愛兒、令孃に、好慣習を涵染せしめんことを敎ふる所以なりとす。女子に尚ぶ所の者は、順柔温和なるに在り。故に、平生敎ふるところ、皆、其の歸向を一にす。座作進退の寛徐なる、應對言語の卑野輕忽ならざる、人々、皆、之を稱譽して、女德の一となす。吾人は、當世の女子を敎育する道に於いて、大に、意見を有する者なり。就中、女學生と稱する女流に向ひては、更に、敎戒警醒の敎を敷かんことを望む者なりと雖、今、しばらく、之を措き、敎育の一端なる、女子の手跡、および、手簡の體に於いて、之を改めしめんことを欲す。蓋、手跡、および、書簡は、固より、意を、彼に致し、日常の事を處辨するを得ば、足る者なりと雖、いやしくも、温良順柔、女性たらば、一は、其の事を

處辨すると同時に、一方には、其の順性柔德を現はさしめざるべからず。若、單に、手簡、文字は、意を通ずれば足れりと云はゞ、婦女子の徐行緩步を敎ふるは、急馳濶步せしむるに如かず。座して、隩障を開閉するは、起てるまゝにて、之を開閉することの速なるに如かず。然るを、之を禁じて、彼を習はしむるものは、其の順性柔德に從ひて、之を敎ふればなり。吾人、當世女子の手簡を見ること多し。文字文章の工拙は論ぜず、其の字體の粗暴なる、其の字句の無雑なる、一見、男女を甄別する能はず。甚しきに至りては、冐頭結文、殆、漢語を以て、之を作るあり。而して、其の人を見れば、蒲柳弱姿の阿孃なり。其の文を讀めば、實に、人をして、一瞥、惡感情を起さしむ。讀者の中、かならず、吾人と、感を同じうするものあらん。吾人は、決して、文を、婉曲柔體にして、

世に街へと云はず。たゞ、其の性質、文字と、相比して、均しからんことを冀ふものなり。一實例を擧げん。吾人に、一小姪あり。年、甫めて十歳。おはしは、書を、吾人に寄せて、起居を候す。文字明了、文意も、亦通ず。然れども、筆意、文體、宛然、甥兒の寄するところの如し。十歳の稚女、髫髮の貌、文を讀みて、其の嬌口痴態の愛を消せしむ。吾人、文を寓して、之を敎戒すと雖、これ、敎育の法に因る者にして、吾人は、はなはだ之を欲せず。

梨園社會の、女優を養成する、鬚眉男子をして、柔弱婦女の性と化せしむ。吾人より、之を視は、取るに足らざる事なりと雖、敎の深き、終に、起居動作より。容貌に及ぶまで、婦人と同じからしむ。況や、天、既に、性を賦して、順柔の女流たらしむ。然らば、其の爲すところ、皆、其の性たらさるべからず。女

子の手跡、文字は、いかに能筆善書の人と雖、其の字體の、婉柔にして圭角なきは、女性の常なり。然るを、何ぞ、其の書體を、卑野剛粗にし、其の文を、漢語梗句にするを用ひん。女流の書體、文章が、柔性流暢なるは、是、亦、美術的の一具なり。其の貌を飾り、其の服を美にす、既に、女性纖細なる美の一なれば、其の芳心に動きて、其の纖手に上る手跡、文章も、性に適し、且、美の一端たらざるべからず。手跡、文章を用ゐずば、則已まん、若、之を用ひば、吾人は、之が性の自然に合せんことを願ふ。

吾人、曾て、之を聞く、古、程伊川、字を書す。かならず、端座して、正しく、之を書す。或人、之を問ふ、程子答へて曰はく、字の正しからんを欲するにあらず。心正しからざれば、書體正しからず、故に然りと。女子の手跡、文章は、一

大に、其の人の品位心實を想見するに足る。否、其の書體、文章を讀みて、其の人となりを豫言すべし。故に、吾人は、女子敎科に用ゐる書は、書體の正しうして、婉柔なるを取り、其の文章は、古來用ゐ來りたる女流文體に、當世普通の語句を交へ、高尙にして婉和なる一格を以てせんと欲す。是、固より、難事にあらず。敎育に從事するもの、少しく、心を、之に用ゐるあらば、十年の功、能く、女流の書風を變せしむべし。手跡、手簡の敎育の道に於いて、細事たりと雖、いやしくも、之に因りて、女德一端の美を養ふに足らば、豈、心を用ゐずして可ならんや。近頃感ずる所あり。書して、敎育家の一考を乞ふと云ふ。

史談

小宰相

大町桂月

平安時代は、我が國の女流社會に、最強く、淫風の吹きすさびたる時代なりけり。此の際に方り、紛然として、社會の風潮の外に立ちて、其の身を汚さゞりしもの、前には、紫式部あり。後には、小宰相あり。紫式部の事は、既に、之を説きぬ。茲には、小宰相の事を説かむ。

小宰相は、頭の刑部卿範賢の女にして、年若き頃より、上西門院に仕へけるが、天の成せる麗質、禁中に、類なく、明眸皓齒、一たび笑へば、花も恥ぢ、二たび笑へば、月も、其の光を失ふばかりなれば、禁中第一の美人とて、其の名、都を動かせり。安元の春の頃、上西門院、花見にとて、法勝寺にものしたまふ。小宰相も從ひまつりぬ。時に、年、わづかに十六、髪あげて、元結の紙白く、唐衣は、櫻の花の紋、裳は、海部をおりて、大海の摺目にかたどれる打扮、いと氣高く、のどかなる春日にほてりて、頬の色、櫻よりもうるはしく、しづかに、蓮歩を移すさま、菜の

花の香を趁ふ胡蝶よりもたをやかに、滿山、にはかに、光を增し、啼く鳥の聲もかをるばかりなり。此の時、平通盛卿、中宮亮にて供奉しけるが、一たび、其の嬌容を見初めて、心、忽、惑ひ、滿目の櫻花、見れども色なく、恍惚として醉へるが如く、あるにもあられぬ思ひして、日一日を過しゝより、流石に猛き武士の膓も、眉の斧に解剖せられて、柔かきこと、さながら、綿の如くなりぬ。

思のたけを、水莖の跡に寄せて、小宰相の許に送りけれども、心正しき小宰相の事なれば、封だに解かず。打棄てゝ、眼も觸れざりけり。かくて、三年も過しけるほどに、通盛は、思、いよ／＼つのりて、命も絕えなむとするばかりなれど、今を限りの文書きて、家の子して、小宰相の家にやりけるに、取次ぎの女房居らざれば、詮方なく、歸らむとする途にて、小宰相が、車に乘りて、參內するに逢ひぬ。折こそよけれとて、使の者は、かの文をぞ、車の內になげ入れける。小宰相驚きて、こは、誰の文ぞと、供人に問へば、知らずといふ。如何なる文にかとて、開き見るに、通盛卿のなまめきたる文なれど、驚くこと、更に甚しく、とても、車の內に置くべきにあらず、さればとて、車の外に棄つべきにもあらぬぞ、已むを得ず、其の文、袴の

腰にはさみて、女院の宮にまゐりぬ。
かくて、かれこれと、公事にいそしみしほどに、其の文、いつしか、袴の間より落ちけるを、小宰相、絶えて知らざりけり。女院、そを見付けたまひ、御所中の女房たち召しつどへて、誰れか落しつると問はせたまふに、女房達、みな、知り侍らずと申せど、小宰相、獨、顔を赤めて、口ごもりけるを、女院、早くも、其れと推し給ひ、且、通盛卿の執心をも、うすく知し召されけれど、文開かせたまふに、細細とかきたるあとにしるせる一首のうた、

我戀は細谷川の丸木橋ふみかへされて濕るゝ袖かな

こは、つれなき人を恨みわびたる言葉なり。かくまで、心の切なるものを、心づよきも、程こそあれ。その文見ては、返事せではあるべからずとて、自、ものしたる奥に、かきつけたまひし御歌、

たゞたのめ細谷川の丸木橋ふみかへしては落ちざらめやは

女院、通盛卿の心根をあはれみたまひ、みづから、なかだちして、小宰相を賜はりけれど、かしこき君の仰せ、いなむべくもあらざるに、まして、木石ならぬ身の、も

とより、いなみたるにはあらず、たゞ、仇なる契に、浮名ながさんは、流石に、口惜しく思ひしのみなれば、うつし身のむすぶの神と伏拜みつゝ、かたみに、うれしくも、かなしくも、思ひせまりて、そゞろに溢すは、ことわり分かぬ涙なり。不義の契はかはさじとて、つらかりし心は、眞に、つらきにあらず、一たび、君の仰よ、妹脊の緣を結びてより、其のつらかりし度を以て、同じさまにむつみあへり。げに、賢不肖無差別なりといふ色海の迷津に臨みて、かくまで、女の道を踏みだかへざりし小宰相の如きは、尊ぶべく、うやまふべく、愛しむべき眞の貞女なりけり。

二十年の榮華の夢、早くも、富士川の水鳥の聲に破られ、木曾の山よりあらはれ出でし旭將軍の旗風に、平家の武運は、はかなくも、夕陽と共に傾き、都をで、淺茅が原と顧みつゝ、妻に別れ、子に別れて、西の海に落ちゆきし平家の公達の中に、通盛卿は、小宰相と離るゝに忍びず、命のあらむ限りはとて、軍の庭に伴へり。福原、前に落ち、一の谷も、終に陷りて、一族、からうじて、船にのがれたれど、此の戰に打死せし人々、いと多かりけり。小宰相も、のがれて、船にありけるが、通盛卿は、いかゞしけむ、待てども、まてども、逃れ來らざれば、いと心細く覺え

しほど、通盛卿の侍に、見田瀧口時員といふ者、ひとり、小宰相の船にのがれ來り、さても、はかなや、殿は、湊川のほとりにて、數多の敵騎の中にとりかこまれ、遂に、木村三郎成綱、玉井四郎資景などいふ東國武士の手にうたれたまひぬ。時員も、共に斃れて、黄泉の御伴つかまつらむと存じたれど、我れ如何にならむとも、汝は死ぬべからず、命ながらへて、最期のさまを、我が妻に語りつたへよと、兼て仰せたまひしかど、惜しからぬ命ながらへて、こゝまで、落ち延びて候と云ひければ、とかうの返事もなく、唯、よゝとばかり泣き沈めり。

小宰相に侍して、都より落ち來れる乳母の女房一人ありけるが、なぐさめまつらむ言葉なく、諸共に泣きふして、日を經るほどに、船は、順風を得て、八島の方に向ひぬ、通盛卿の打れたまひし湊川のあたりは、益遠ざかりぬ。なほ、かなたぞと見やる空に、かすみ空しくたまびきて、眼とゞかず、くれゆくまゝに、朦朧として、海の面を照らせる春月に、一文字を畫きて、飛びゆく歸雁の影、いとあはれなり。

此の時、小宰相、孕みて、巳に、三四月を經たり。玉の如き男子をや生まむ、花の如き女子をや生まむなど、共に語りて樂みしは、昨日の如く覺ゆるに、良人は、は

や。此の世の人にあらず。思へど、味氣なき世の中や。今は、誰の爲にか、子は生まむ。たとひ、身々とならむとも、徒に、胸の苦を増すばかり。とにも、かくにも、生きて詮なき此の身、幽明、相隔てゝ、空しく、人を思はむより、はやく、波の底にも入りて、戀ひしき人のあと追はゞやと、決心して、乳母に、細々と遺言し、我がなからむ後は、都にのぼりて、ありし人に、此の身の成るはてを物語り、靜に、我が菩提を弔ひてたべと頼みけるに、こは、思の外の事をうけたまはるものかな。家をすて、子をすてゝ、玆迄從ひまゐらせしは、君と、生死を共にせむと思ひ侍れどなり。さるを、死なば共にとはのたまはで、生きて、京都に歸れとおはせらるゝこそうらみなれ。つら〳〵思ひはべるに、死ぬるのみが心の誠にはあらず、まこと、亡き人を慕ひたまはゞ、都に上りて、身々となり、忘れがたみの御子を如何にもして、育てまゐらせ、なき後を弔ひたまふこそ、まことの道には侍らずや。もし、また、死なで叶はぬ事におはさば、妾をも、共に、冥途に倶したまへと、涙を流して諫めければ、一たびは思ひとゞまりたれど、かなしさ、なは堪へがたく、且、平家の行末の、遂に、望なきを察して、午の刻過ぐる頃、ひそかに、衾を出でゝ、船端に立ち、

傾く月に、手を合せて、ふし拜みたるまゝ、身を躍らして、奈落の底までもと、飛び入れば、月の影、忽ち碎けて、さわぎ立つ千鳥の聲寒し。

此の水音に、一人の楫取、目をさまし、乳母の女房を始め、船中の人々を呼び起して、海中を探りて、取り上げむとて、舟人數多、波に下りたれども、容易にさぐり得ず。程經て、すくひ上げたるに、三寸、息絶えて、玉顔、已に蒼ざめたり。最早、生命を復し得べくもあらねど、今は、これまでなりとて、其の屍體に、通盛卿の殘し置きたる着長をつけて、再び、海底に沈めけるも、せめての情なりけり。乳母も共にと、思ひたちしが、人々に妨げられて、果さゞりきとかや。あはれ、机上に、山をなすばかりの玉章をしりぞけて顧みざりし當年のつれなき女が、かく、夫の後を慕ひて、其の身を殺すまでに、至情貞烈の行を爲すに至りたるを怪しむことなかれ。不義の契はかはさじとて、其の身を謹みたるも、死なば共にとて、其の身を殺したるも、共に、ひとしく、女子が一心の誠に外ならざればなり。

備前少將光政の夫人　　秋田蔌茎子

備前少將光政の夫人は、本多中務大輔忠刻の女にて、天樹院殿の生める所なり。されば、柳營にても、御心寄重くおはしけれども、少も誇ることなく、能く、所夫に仕へて、尊敬を致され、たりといふ。御子多き內、伊豫守綱政朝臣の外は、皆、女子なりしかば、常々の敎訓に、

一　女は、女の樣なるが能しとこそ聞きつれ。かゝれば、何事も、心より、心を治めて、男に増らんとな思ひたまひそ。

二　諸々のまがごとは、夫を尊敬せざるより起る。夫婦となるは、皆、神々の引合せにて、おろそかの事にあらず。されど、如何樣の夫なりとも、夫と定まりし上は、尊敬せでは叶ひがたし。

三　婦は、內を治め、夫は、外を治むること、古今の定法なり、牝鷄晨すといふことあるべからず。尤、大名は、夫々の役人ありて、內外を取賄ふ故、上としては、唯、大度やうに、慈悲を専に柔和を主とし傲慢はしたなきまさなどとなんど仕出して、愛想つかさるゝことなきやう心懸るを、本妻の道といは

ひ。

四　少しにても、嫉妬の心を出すべからず。又、必、萬事に、心を注けて、夫の疑を受けぬやう愼むべし。夫、萬一、過あらむ、氣のたゝぬやう、心靜に諫むべし。夫、自然に覺りて、改むるに至るものなり。善惡ともに、身に反みて、求むといふことを心得たまへ。

五　高き賤きに拘らず、貧富は、其の身の命分なり。大名とて、貧者なきに限らず。小身にても、富榮えずと定めがたきが浮世なり。女は、夫の官祿を得て、其の程々に過すとは、紫式部の筆の妙、今に傳へて語るめり。さはれ、織、縫、紡ぐこと等は、貴人、高位とても、知らではならず。貴人、高位に曰、要なしと思ひて、わだにくらさむは、大なる僻事といひてまし。是は、天性、女の役と心得て、かりにも、疎になしたまひそ。

となん示されける。夫人の風俗、此の如し。夫君少將、文武の道にかしこく、政事正しうして、敎化厚く行はれ、當代は固より、今に至りて、海內、仰ぎて、岡山烈公といひて、會津神公、水戸義公と、ならべ稱するも、宜ならずや。

徠翁の政談に、「夫人と、妾とは、其の間、宜からずて、種々、出來事のあるを歎き、松平伊豫守の奥方、家庭の敎艸にとて、風儀の宜きことを援きて語られけるやう、某は妻の母、物語りしは、若き時分、某の家に仕へて、段々察し侍るに、妾なんど、子を持ちたるが、やはり、奥方に仕へて、外の女中並にて、何の替りもなし。只、切米の少し好きと、奉公の、聊、樂なるまでの事に侍り、云々。そも、綱政の夫人は、天禀賢明におはし、さやうの者と見れど、殊にねんごろにせられけり。類は、友の喩とて、參候するものも、亦、皆、愚なるはなかりけり。奥向にての遊興は、管絃、歌學、手習と定まり、三味線、筑紫琴などは、大名のせぬこととなりと禁めて、玩ばるゝことなかりきと聞く。豈、先公、深く、聖道を崇び其の夫人、亦、聰名、能く、婦德を全うしたりし餘澤遺功にあらざらんや。云々。」夫の詩に、螽斯羽振々兮。宜爾子孫。といひしは、正に、此の義に適へり。嗚呼美哉。

漫録

詞のしるべ（三）

玉のや主人

一　あさがほ（朝顔）といへば、今は、單に、牽牛花のみをいふやうなれど、昔は、決して然らず。朝咲くなる美しき花を、皆、あかへるなり。もと、かほかたちの、すぐれてうつくしき花を、かほ花といひたり。それより、朝毎に咲く美しき花を、皆、あさがほといひたるなり。桔梗といふ花は、朝に開き、日中は萎み、又、夕に開くものなり。故に、桔梗をも、朝顔といひたり。新撰字鏡に、

「桔梗加岐久波又云阿佐加保」

といふ事見ゆ。又、萬葉十五の卷に、

あさがほは朝露おひてさくといへど
　ゆふかげにこそさきまさりけれ

といふ歌あり。これは、牽牛花にはあらず。牽牛花ならば、夕には、決して開かぬものなればなり。唯、桔梗は、朝に開き、夕に、又開くものなれば、桔梗をよめる事知るべし。

一　かすみ（霞）と、きり（霧）とは、全く異りたるもの丶やうにおぼえ、又、春に立つが霞にて、秋にひくが霧なりと思へる人あれど、誤てり。霞といふも、霧といふも、もと同じものにて、霧は、たち隔つ方よりいひ、霞は、ぼんやりと、もの丶、かすかに見ゆる方よりいへるのみ。故に、唯、そ

の度の深浅の差にて、霧の方、霞より、やゝ深きなり。秋の日、霧のみを心得たるは、ひがごとにて、霞ともいへるなり。萬葉集二の卷の歌に、

　秋の田の穂の上にきらふ朝霞
　　いづべの方にわがこひやまむ

とあるを見よ。ことわりは知られなむ。

一　とつぐ（嫁）といふ語、今は、女の、男にあふ方にのみいへど、もとは、さにはあらず。男女のあふことにて、女のゆくをも、男のゆくをも、いづれの方よりも、いひたり。祝詞の中、鎮火祭の詞の中に、

「神伊佐奈伎伊佐奈美乃命妹二二柱嫁繼給底」

といふ詞あり。男女のあふことを、いづれよりもいひたる事、明なり。又、古今著聞集の中に、

「渡邊にて番が妹にとつぎけりと」

とあり。男のかたよりもいへる事、知るべきなり。

一　しま（嶋）といふ語、昔は、大陸を離れたる孤島、および、岬をもいひたることは、前回にいひたるが、なほ、古歌、古文に、島といひて、俗にいふ作庭、泉水、築山の事をいへる事、數多あり。昔の文まなびする姫だちの爲に、一ッ二ッかいで記るさむ。伊勢物語七十八段の所に、山科の法親王が、泉水、築山を愛し給ふよしをいへる所に、「島好みたまふ君なりけり」といへる語あり。萬葉集の歌には、數多あり。まづ、二の卷に、日並皇子尊の薨去ましく〱し時、その宮の舍人等の、慟哭してよめる歌に、

　みたゝしゝ島を見るときにはたつみ

ながるゝ涙とめぞかねつる
みたゝしゝ島をも家と住む鳥も
あらびなゆきそ事かはるまで
みたゝしゝ島の荒磯をけふみれど
おひざりし草おひにけるかも
あかねさす日の入りゆけどみとゝしと
島におりゐてなげきつるかも
つれもなきさだの岡邊にかへり居ば
島の御橋に誰かすまはむ

など、數多ある島は、皆、宮の御邸の築山、泉水等をいへるなり。此の宮の此の御邸は、橘といふ所にありて、築山、泉水を、おもと作り搆へ給へりしかど、橘の島宮とさへ申したるなり。また、萬葉集六の卷に、歌舞所の諸王臣子等が葛井連廣成の家に、宴したるときの歌に、

春されバをゝりにをゝり鶯の
なくわが島ぞやまずかよはせ

とあるも、作庭の事なる事、明なり。又、同十九の卷に、新嘗會の肆宴（とよのあかり）の節、右大辨藤原の八束朝臣が、よめる歌に、

島山にてれる橘うずにさし
つかへまつるはまうちぎみたち

といへる島山は、大內の御庭の島山なり。又、同卷に、內藏忌寸麿の舘にて、宴樂ありたる時、遊行女婦蒲生娘子がよめる歌、

雪島のいはほにおふる撫子は
千代に咲きぬか君がかざしに

これも、庭の島なり。此の外には、二十の卷にも、

大監物御方王が、山齋を眺目て、詠みたまへる歌、

をしのすむ君が此のしまけふみれば

あしびの花も咲きにけるかも

これは、池に、鴛の住める君が家の島といへる事なり。まれらにて、知り給へ。

一「いさ」と「いざ」と、清濁の差のみにて、おなじやうなる語なれば、今の人は、取りませて、おなじ意味のやうに用うる人あれど、いみじき僻ごとなり。いさと、いざとは、痛く異る語なり。いさといふは、知らず、否、或は、いや、或は、いかならむなどいふ意味の語にて、萬葉集十一の卷に、寄物陳思の歌の中に、

狗上の鳥籠の山なるいさや河

いさとをきかせわが名のらすな

とあるいさは、不知なり。又、落窪物語の中に、

「何の名ぞ、落窪とはといへば、女いみじくはづかしく、いさといらふ。」

とあるいさは、否の意なり。又、枕草紙に、

「何とか、これをばいふとといへど、とみにもいはず、いさなど、これかれみあはせて、」

とあるいさは、いやといふやうなり。又、榮花物語のゆふしでの卷に、

「この北の御門よりこそは、渡らせ給ふべかめれど、申させたまへば、いさや、さやうに、この人々は、いふめれど、」

とありいさは、いかならむといふやうの意なり。

又、いざといふ語は、さあ、さらばといふ意にて、他を誘ひうながす意に用う。例へば、萬葉集の一

の巻に、

　いざこどもはやもやまとへ大伴の

　　御津の濱松まちこひぬらむ

とあるを見よ。この類ひ、いと多し。くだ〴〵しくいはずとも、古今集より二十一代の歌集、或は、源氏物語、枕草紙、その他、さま〴〵の書に、あまた見ゆるものなり。よし味ひ給へ。いざとは、大に異り。

又、いでといふ語あり。今の人は、いざとおなじやうに用うれど、これも、やゝ異り。いでも、促すやうの意あれど、これは、われにつきていふ語にて、いざの如く、他を促す語にはならず。どれ、いやもう、などいふやうの意味あり。又、やゝ、嘆息の意に、必、伴ふ語なり。

一「いとはしむ」といふ語、今は、哀れむといふやうの心にのみ用うれど、古のいとはしむは、勞といふ意にて、ねぎらひていへるなり。數多、例あれど、思ひ出でたるを記せむ、續日本紀、三の巻の、慶雲四年四月、藤原不比等朝臣に、食封を賜へる時の詔の中に、

　わかき淸き心を以て、朕を助けまつり仕へまつる事の、重しき勞しき事を、おもはします御意ますによりて、たちまひて、やゝ見たまへバ、忌み忍ぶ事に似る事をしなも、常勞しみ重みおもはしますくとのりたまふ。

とあるを見たまへ。まさしく勞ふといふ意なり。

一お(子)といふ語、今は、父母が、わが子をいふやうのみなれゝど、むかしは然らず、子にて

も、孫にても、祖の後を承くる者を、皆、子といひたり。また、おや（親）といふ語も、自身の父母の事のみをいはず。祖先は、皆、おやといひたり。自身の生父母をのみいふやうなりたるは、奈良朝以後の事なりかし。

一「雲井」といふ語は、「雲の居る處」といふ義なり。「井」の字は、宛字にて、何の意味もなし。もとは、「雲居」と書きしが、「井」も、「居」も、共に、ゐの音、後世「雲井」とのみ書きならはしたり。さて「雲井」は、「雲の居る處」にて、即「空」の事なり。さるに、後世、單に「雲」のことを、「雲井」といふにいたれり。即、後世「雲井」には、「空」と、「雲」との兩義あるなり。詞華集に、

わだの原漕ぎいでゝ見れば久方の
くもゐにまがふ沖つ白波

此のくもゐは、單に、雲の、意味なり。

一「夜半」といふは、單に「夜」のことなり。「半夜」の意にあらず。「は」は、添語なり。「宵」といふも、單に、「夜」のことなり。「ひ」は、添語なり。古歌には、皆、其の意に用ゐたり。又、「夜深き」といふは「深夜」の意にあらず。「初夜」の意なり。古歌に、「いづかたに鳴きてゆくらん郭公よどのわたりのまだ夜ふかきに」とあるは、「初夜」の意なり。

一「いざり火」と、「かゞり火」とは、同じ物なり。「かゞり火」とは「輝く火」といふ事なり。「いざり火」と「磯狩火」なり。「かゞり火」を以て、漁に用うる時は、之を「いざり火」といふなり。

櫛のあか（二）

故人備中　木下幸文

（宣）さて古にならふにつきては、今の世にこそなる事多くして、今はさしもあらぬ事も、古の人は、いみじき事にして、多くよめるも多く、今の人のいみじくもてはやす事も、古の歌には、よまぬも多きを、さるたぐひ、大方今の世にはかゝはらで、専ら古に從ひて物する事也。

（幸）毫釐千里とかいへる、から人のたとへの如く、かゝる事さへ、出くるこそ、いとも〳〵浅ましく悲しけれ、かくては歌はまことの不用の物にて、心をやるなどいへる筋は、絶たるものとなりぬ、今物にあたりて、あはれとも、悲しとも、思へらん時、それを、やがていひはるけんとはせずして、これをた、古人はいかゞ思ひけん、源氏などに、さる心ぞへ、ありやなしやと尋ねて、もし其趣なる事なき時は、いはでやまんとするか、又事にふれて、大方なげきの心おこらぬ時も、其事のさまを、例の思ひめぐらして、かゝるをぞ、古人は悲しとよみたるからに、今もよむべしとて、いひ出よとや、凡人情うれしかるべきはうれしく、悲しかるべきは悲しく、哀なるはあはれに、面白きは面白き、大むねの定まりは、さる事ながら、其日其時の心ありて、さぞかりならぬ事も、あやにかなしく、いみじく悲しかるべきにも、涙こぼれぬたぐひ、すべてあやしく取とめ難きぞ、情といふものゝ常なりける、されど古はとまれ、人はいか

にまれ、其感のすゝみたらんまゝをいふぞ、歌の旨なるべき、先これは情の上につきていへるなり、すべて草、木、鳥、けだもの、種々の物の上なども、古はありて、今なきあり、古なくして、後に出きたるあり、たとひ古なき物にして、歌よめる例あらずとも、夫につきて、感あらんには、よまざる事を得ず、只其物實の俗たるものにして、歌とよむばかりの感なき物は、もとよりいはず、其物ざねは趣あり、感ある物にして、其名いやしき物などは、打つけに名をいはずして、其感ずる心ばへをいふべきなり、又物は古今同じくて、それをめづる心ざまの、古今異なるものは、只今日の日の情に從ふべし、たとへバ、郭公は萬葉集など、大かた物思ひをすゝめて、悲しき鳥によみ來れるを、中頃よりは、めづる心を專らとして、夜もいねず待あかすよしをよめり、其習はし、やがて今日の日の人情となりぬれバ、おのづから先其方にいはるるなり、されど時にあたり、所につけて、悲しく聞ゆる時は、又悲しき意にいふも、やがて其心なれど、かゝはる事なし、鹿なども秋情を添て、物悲しき方のものなれバ、古歌にはさる方にのみいひたれど、今にては、鹿の音きゝにとて、山踏することなどあり、さる時は、これを待よしなる歌よまんこと、もとより論なし、とにかく今の誠の情をおきて、古人の方をのみまねぶといふ事はなき事なり、

(宣)古人は、月花をめでつる心の深きこと、又そ

れにつけて、思ふことのすぢを感せしほどなど、今の人とはことなかりき、今の人は、一わたりこそ、花は面白し、月はあはれなりとも見るなれ、深く心にそむばかりはあらぬを、歌には只いにしへ人のこと、深く思ふさまによまずも有べからず、今の人の心のまゝによみたらんは、あはれ淺かるべし。

（宰）今の人といへども、情の淺き深きは、人々ひとさへならねど、月花をめづる心の、古人におとらぬ人も有まじきにはあらず、されどおさ並てをいはんに、古人の月花めづる心は、今の人にまさらんことは、論の如し、さるを歌には、たゞ古人のごと、深く思ふさまによめといはれたるは、例の偽を教へたるなり、さるは情あさきが、情ふかきにおとれる事は、論なけれど、それ今日の人情の限ならば、いかゞはせん、よし淺き心もて、しひて深げに思はぬ事を、たくみなしたりとも、おのづから偽はほころびて、淺き心のまゝならんよりは、中々あはれ淺かるべし。

（宣）又旅せぬ人も、旅の歌をよみ、戀せぬ人も、戀の歌をよむたぐひ、すべて皆、いにしへを、ならひまねぶにあらずや。

（宰）かのまねびて、よめといはるゝ中昔の頃の歌は、もとよりにて、今の世の歌とても、あながち題よみばかりにてもなく、實にあたりて、いひ出るうたも多かるを、一向に、題よみの定めもて、論ぜられたるは、いかにぞや。

(宣)抑萬の事、古の情ならんからに、全く歌によめるバかりはあらざりしことも有べけれど、竊に思ふことを慥にいはんとては、まことより過て、いみじくなるは、おのづからの勢ひぞかし、彼よきさまにいふとては、よき事の限をえりいでゝ、いへるが如く、歌も物のあはれを、深くいひて、見る人、きく人を、深く感ぜしめんとするわざなれど、古の歌ども、たとひ、實よりは過たる事のあらんにても、そはともかくもあれ、いふべきにあらず、只其頃の有様を、まねぶべきわざになん有ける。

(幸)是に至りて見れバ、古の歌をも、やがて僞とせられたるなりけり、抑物語どもは、殊にかまはて、作りたるものなれど、いかにもあはれなる事の趣を、さるべく、もてつけて、かゝんこと、ことわりいはれたり、古今集あたりの歌は、彼題詠はいとすくなくて、大方事にあたりての歌どもなれど、其なずらひには、いふべきにあらず、只此頃はひ迄の歌は理りに過たる事こそ有べけれ、情の實に過ていふといふ事は、あることなし、歌は理りをいふ物にあらず、情のまゝをいふものなれど、さらに僞にはあらず、たとへバ、いと苦しかりし事をいはんとて、死ぬるめ見たりなどいふたぐひなり、これを理りもていはゞ、死ぬるめの苦しきは、いかでかりと知るべからねバ、かく定めていへるは、實に過たりといふべし、されど其苦しき情の切に、たとしへなき方よりいふとては、おのづか

らしがいはるゝなり、其苦しかりしは、さばかりなれど、人にせめて深くきかせんとて、其時わざと、しよかまへていへるには、あらざるなり、此情と理とをあきらめずして、見たらんには、古の歌は、大かたいつはりとなりぬべし。

(宣)さて此物語を、つねによみて、心を物語の中の人々の世中になして、歌よむ時は、おのづから、古のみやびかなる情のうつりて、俗の人の情とは、遙かにまさりて、同じき月花を見たる趣も、こよなくあはれ深かるべし、さるを近き世の人は、古の歌をまねぶとはすれど、古人の世中をしらず、其情にうとくして、只おのが、今の心に任せてよむ故に、古にたがひて、鄙しげなることのみ、多く出くるぞかし。

(幸)大かたは、上の論どもに事つきたり、猶次の條下にあはせいふべし。

(宣)歌のみにもあらず、ふるき集どもの詞書などを、見るにも、物語にうとき人は、其世の有さまを委しくしらざる故よ、しらぬ世界の心地せられて、物遠くおぼゆるふし多きを、此物語をよくよみて、そのかみの世中の有さまに、心のなれぬれば、古き歌は、さらにもいはず、一くだり、二くだりよむ詞も、今の世のおのが里の事を、見きゝたらんやうに、近く親しく覺えて、物のあはれも、今一きはまさるわざぞかし、かへすぐ\も、歌よまん人、また古のみやびを思はん人は、殊に此物語をなん、よく見べきわざなりける。

(幸)此物語をよくよみて、古き集の歌詞書など

も、其心うまく得られんは、論の如くなる事、既にもいへり、素より歌よまんほどの人、此物語には限らず、大かたさるべき書ども、よまでは、昔今の世のたゝずまひ、人のありさまなども、委しからで、かの墻に面ひて、立らんこゝちすべければ、必よむべきわざなり、只其古書をよみて、古の心、しわざをしるは、常の心のまなび、今よむ歌は、けふの我情をいふ事と心得て、其歌よむ上には、聊も古をまねび、人に諂ふ心なくて、只其感ずる眞心の限を、よみ出べきなり、さるは初學の間、心に任せていはんには、俗たる心詞もなどか交らざらん、そは師に問まねび、傍ら古の書なども見つゝ、年月を積ねたらんには、我眞心にして、云かも俗情まじらぬ歌をばよみつべし、かへすがへすも、我情に本づかずして、只に其趣をまねせんとするは、ぬしなき家に、花の木をうゑ、空車に袖口出したらん心ちぞせらるべき、さて此書中は、此物語の歌のよきよし、論はれたるうへ、猶其外にもいはまほしき事ともあれど、さのみはとてなん。（をはり）

難波江のはしがき

白川少將定信公（致仕後、樂翁と稱せらる。）は、田安大納言宗武卿の御次男にて、十八の時、松平越中守定邦朝臣の養子として、其の家を繼ぎ給ひしが、爲人、寛厚仁恕、智勇兼備はり、文武ともに秀で、中にも、書と和

歌との如きは、深く學び給ひしにはあらねども、妙に、其の蘊奥を究め、名ある人も、舌を卷きて、及び難きを感稱せしとぞ。幼稚き折は、病弱なりしが、養生に注意せられ、七十餘歳逝去の頃迄、いと健康にをはしけり。學文を好み給ひ、著述、又、少からず。十三の時、初めて、自敎鑑といふを著し給ひし後、凡、五十年間の著述、一百數十部、内、集古十種、輿車圖考等は、殊に、著名の大作なり。寔に、菅家以後の一人と、識者、普く崇敬するも宜なるかな。委細事は、本傳紀にゆづるとして、此に、安永五年、公、十九の時、其の夫人の懇請に應じ、かきしるして贈り給ひし難波江といふ書を掲ぐ。(但、句讀と、傍訓とは、後人の附せしものとす。)

難波江

ふるきはうごより、この卷とりいで見侍れば、こは、安永の頃、予がかきつゞりて、姪子へおくりしを、ひめおかれしなり、もとより、つたなき言の葉、たぐひなき物から、なき人の手ふれけんと思へば、さすがに捨がたくて、そのよししるしつゝ、をさめ置侍るもの也。

文化二年八月　　定信

難波江のよしあしもわきまへぬ愚かさをかへりみず、かとはまのうとからぬ人の爲とて、五月雨のふるきためし、夏引のいとの長き言の葉に、淺香やまの深さ淺さを述侍るも、かつ、はゞかりの關こゑがたくこそあれ、

一夫れ、人は、天地の氣を受て生る故、性、もと、善なり、然るを、七情の起るにしたがひ、萬づの物にさそはれて、つひに、其性をとり失ひ申候、若、人の人たる行なくバ、鳥けだものゝ類なるべし、さて、人たる行ひは、五常五倫を申候、五常は、仁義禮智信をいひ、五倫は、父子有レ親、君臣有レ義、夫婦有レ別、幼有レ序、朋友有レ信、これを、五倫と申候、この五常五倫、人々の性に備りて、新たに行ひうることにてはなく候、いとも安かるべきことに候へども、人々、此性をとりかへし候ものなく候、夫は、誠に、鳥獸の類ひにして、醉生夢死にて候、かへすぐ歎かしき事に候、女は、博學になり不レ申候て宜敷候が、此性にかへる所は、是非學び不レ申候はではならぬ事に候、私の欲を去り、性の善にかへるは、また、學文によるべくと存候、

一それ、男女は、則、天地陰陽の道理也、女は、陰の德にして、專らにする所なきことにて候、子婦、無二私貨一、無二私畜一、無二私器一と申候て、幼なるときは、父母に隨ひ、嫁すれバ、夫にしたがひ、夫死すれバ、子に隨ふ、是を、三從の道と申候、專らになすことなきゆゑ、一ッの器、一ッのたから、皆、わがものにてなく候と申候事にて候、

一女の德は、無レ非無レ儀と申候て、男の行ひとは、格別にて候、溫和貞靜にして、專制の義なきを貴び候、

一女は、敎令不レ出二閨門一、事在二饋食之間一と申候わけは、敎令することも、おくの內のみにして、

しきみを出です、つとめは、只、食をとゝのへなどするのみにして、外事をなさゞる事にて候、しかし、食をとゝのふるは、小人の婦の事にて候へども、萬づの事に心得あるべく候、哲夫成レ城、哲婦傾レ城、懿厥哲婦、爲レ梟爲レ鴟、婦有二長舌一、惟厲之階、亂匪レ降レ自レ天、生レ自二婦人一、かくの如く、詩經にあり候故、猶更、女は、ことずくなにして、外をいはず、女の、才高く、巧言なるは、亂のきざしにて候はずや、紂の妲己、幽王の褒姒、吳王の西施、獻公の驪姫、みな、巧言令色にして、ついに、國をみだし申候、牝鷄無レ晨　、牝鷄之晨、惟家之索也と申候へど、かへすがへすも、非なく、儀なきの所を行ふべきことにて候、

一、男女相授るには、手を以て授けず、下におきて授く、もし、下におくことを不レ能者は、受るに、簞を以てすと、是、古の禮にて候、當時は、男女の間、かろ〴〵しくうちまじり候など、へだてなき歡樂と思ひ候、如レ斯ときに、手を以て授けじとし、門を出れど、其面を掩はんとなどすれば、則、ならはしにそむくべく候、古の世は、しかなり、今の世には、かくの如しと、時の勢を審にして、其宜きに隨ふこそ、いみじく覺え候、

一、婦は、小心愼密にして、專らにする所なき事にて候へ共、夫、淫樂にのみふけりて、國政に怠り候はゞ、是、また、いく度も諫めて、善道にうするやうになすべく候、瞻二彼日月一、悠々我思、道之云遠、曷云能來、百爾君子、不レ知二德行一、不レ忮不レ求、何用不レ臧、と申詩有レ之、周の頃、

夫の軍役に、他國へ行きて、久しくかへらず、故に、婦の、思ひしたひて賦りし詩也、初の章は、日月往來をみて、夫の、久しくかへらざる事を思ふなり、次に、百爾君子とは、すべて、凡そ、君子德行をもしり給ふ事なれど、わが愚なる心に思ふには、人、そねみ憎まず、むさぼり求めずして、手前さへ正しく守らむ、何を行ふとても、あしきことやあると、もし、夫の不慮の禍など得なば、今までの令名もむなしくならむことを思ひ、其身を全うせんことを思ひはかりてつくりしなり、其頃は、民間の女までも、厚き風俗なりしをも知るべく候、夫の、久しくかへらぬを思ひしたふは、なべての婦の常情なり、深く、夫の身を全くし、令名の汚れんことをはかりしぞ、至て感ずるにあまりあり候、また、詩に、鷄既鳴矣、朝既盈矣、匪㆓鷄則鳴㆒、蒼蠅之聲、東方明矣、朝既昌矣、匪㆓東則明㆒、月出之光、蟲飛薨々、甘㆓與㆑子仝夢㆒、會且歸矣、無㆓庶予子憎、いにしへの賢妃の作る所なり、朝盈るとは、諸の役人、政をなす所にみちて、君の出るをまつなり、君、もし、遲く出む、百官の、君を怠れりといはんことと思ひはかりて、蠅の聲をきゝて、鷄のなくねと思ひ、月の出るをみて、東方の明ると思ふ、懇切なる情なり、蟲飛薨々とは、夜あけむとして、蟲のむらがり飛なり、君と、床枕をともにして、夢を同じくする事を、いさゝか、たのしみとせざるにはなけれども、只、予がゆゑを以て、人の、君をそしりにくまんことを恐れてなりといふ心なり、かくの如き

ためしとあれバ、いよく\、内にすさみ怠りて、人のそしらんことを諫むべきこそ、婦の至情ならめ、

一、不レ忮不レ求といふは、至て深きことにて候、女は、猶更、狹き心よりは、人の富貴をみて以らやみ、又は、嫉みにくむの心あるものにて候、西銘といへるに候が、それ、天を父とし、地を母とすれバ、萬物、吾與にして、人は、吾兄弟なりといへる事あり、人、吾と隔つ故、そねみの心も生じ候、人も、吾におなじ氣を受て生るれバ、吾好む事は、人も好み、吾も嫌ふ事は、人も嫌ふぞかし、それを、吾はよしとて、獨行ひて、人の行ひをバそねみにくみ、吾不レ好事をバ、人に與へて行はせんとす、甚わしき心なり、吾よしと思ふことは、人にもさせ、わがあしきと思ふ事は、人にも行はせず、此處を、恕と申候、恕とは、心の如しとかきて、吾の如く、人の心をなすと申事にて候、范忠宣公、子弟を戒めて曰く、人、いかなる才ありといへども、己をせめとがむる事は明らかならぬもの也、己をとがむる心にて、人をはかり、人をとがむる心にて、己をとがめバ、則、聖人、賢人にもいたるべしといへり、此事、淺きやうなれども、深遠の意ある樣に覺え候、又、劉備、劉禪をいましめて曰く、惡は、少しきとて、行ふことなかれ、善は、すこしとてせざる事なかれと、是、古今不易の言といふべく候、かほどの惡は行ふとも、害にいたらじと思ふ心より、大惡もきざすものにて候、又、かほどの善はなすとも、益あ

るまじと思ふ心より、大善も行はれざるものにて候、小といへども、善とさへ思はゞ行ひ、小といへども、惡とさへおもはゞ行はずぞ、惡、おのづから去て、遂に、性の全きことを得べく候

夏野の露

師岡須賀子寄贈

卯の花くたちどかや、晴間なき霖雨のつれ〴〵に、かきさぐりし文庫の中より、見いでたるこのふみよ。上田秋成先生の内きみの遺されつるにて、去る頃ある人の、櫻木にゑられしが、あまりに、そのかみの偲ばるゝまゝに、送りまゐらす。あはれ、いかならん。餘白をだにかしたまへかし。

序

その子すら、さぞかり、吾はと思ひあがれると、まじらひくるしく覺ゆ。まいて、女は、大かた、唯も心せばきからに、はつかにも、知ることは、ちに出でゝ、きら〴〵しきなむ、他に見るも憎きを、此の君なむ、若きより、夫の君にひかれて、見聞きしとも多にざるかし。歌よみし、文かき、筆のすさびも、拙なかざりしよしなるを、露も、けしき見せず、暮ると明くと、食物てうじ、衣ぬふつとめにのみ、かゝづらひ給へれば、常に、行きかよふ人すらも、其のちゑをしるものなかり計らし。かくて、思ひかけず、とみに、なくなりたまひしかば、翁のなげき、大かたならねど、せんすべなければ、殘し置れしものゝ、ちりはひなむも、見ぐるしとて、手ならなど、さぐりたるに、

此の一まき出でたり。なほ、よくしたゝめて、後にとてや、ゆめしらへず、かきけち、書加へなど、反古のつらのものから、長柄の庵より、此方へのうつろひまでのあらましを述べられたるにて、北の事も、いと悲しきに、いとゞ、歎きを添へて、形見こそ、今はあだなれと、よく讀むに堪へず、打すてゝ、日頃へぬれど、やう〳〵、心をしづめて思へど、是にますなごりのなかめれど、たど〳〵しながら、書うつしぬとて、翁、みづから、此のよしをしるして、はしには、おのれに、言そへよと、あとらへたまへれば、否むべきことにしもあらず、なほ、はた、命の限り、かゝる風雅のけしき、見せたまはざりしことのいみじきものゝ、今は、をしくおぼゆる心を、いさゝけ、述べはべり。

夏野の露

洛甫老樵関田薫嵩

田鶴の居る長等の濱松かげに、翁ありけり、身の病はらさんほどを、いと、假初なるいほりして住みけり。此の垣の隣に、よに貧しくて、親はらからすむ人あり。心の直かりければ、朝夕とひかはしつゝ、懇になむ、かたらひける。それの年、妻を迎へて、男子の生れしを、かいだきて見するに、いと多きやかに、玉の光をさへして、愛たかりけれど、誰も〳〵、限りなく喜びあへり。此の子の二つといふとしに、とはらど、病して死にけり。年月ふるほどに、愛嬌づき、舌とく、物いひで、萬に、才有りてみゆるを、翁、いといたう、いつくしがりて、身の惱めるをも忘るゝものに、たゞ

膝の上に居置きて、いとをしみ給へりけり。我は、まして、是をのみ、かしづくやうにて、翁の物、おのがものをも、縫ひつだくりて着せとりはやすにぞ、一さとの貴しきが、子持たるは、あやしうねたがり、愛で羨む事となむ、三に成りぬる秋の頃より、ふとした、艱ましき氣にて、健なりしと見しも、漸う衰へぬるに、翁、かなしがりて、藥のしるし見せ給へと、さながらにてなん、年もくれにける。親は、まして、神ほとけに、願たてけり。此のゆかしき目、みるに忍びがたくて、心も亂るゝばかりなるに、人の敎ふるは、いづれの御神、みほとけに、優劣はあらじを、地藏菩薩なん、かうやうの時は、打頼みたまへと聞ゆるまゝに、近き所にいはひまつれるに、日毎あゆみを運びつつ、かきくどき、願言して、打ちあつけ奉れど、如何にせん、三輪の山もと、しるしなく、過ぎ行くほどに、今は頼みなく、いみじき事、かぎりなし。春さり、夏の初の、この、菩薩の拜みする日といふに、導かせたまふにや、むなしくなりぬ、あなや〱と、なきさけべど、甲斐なし。翁、足ずりをし、聲をあげて泣き給へり。是を見る目の苦しくしてなん、いかなる過世にや、親にまさり、生立たらむ、末までも、兎やせまし、角やなど、打ち〱、おきてさせ給ふものを、今は、何も〱、かひやはあると、枕にのみ、獨ぢたまふ。この二年がほどは、萬よ恐しきまで、大人びつるは、長かるまじきにや有りけんなど、口々にいふ。かぎりあれど、野に送り出で、灰になしはてぬ。作法

よりして、なにも〳〵、我が翁の德になん、行ひたまひぬる、手足も、からず、起居だに、心にまかせず、泣きくらすほどしてあれ。烟の下に拾ひとゞめしを、今はとて、難波なる一心寺といふみ寺にをさめまく、我が肌につけて、翁をたすけ參らせ、遙々と、まうで侍りて、

花みれバ秋のしもにも逢ふものを
　　このなでしこの盛またずて

といへバ、翁は、耳ふたぎ給ひて、物も云はせたまはず、此處に納むとこそいへ。捨てゆくものに、杖をもつきたがへて、こい轉び給へるを、我も、涙に、目のみくらみて、扶けかねつゝなん、日をふれど、更に〳〵疎からず、人目むとくにみておはしけれ。梅雨ふりはれぬれど、心さらず、おかるからずとて、おきなの、

聲はせで目にのみ見ゆるさみだれの
　　やみのうつゝの山ほとゝぎす

是のみならず、この里の住居の轉おぼす事ども、かれやこれやと多かるに、今は、旅に飢ゑて、死なんとしもおぼし定めて、先、都に、志させ給へるに、おくれず、從ひまつる。我が故郷なれバ、昔思ひ出でゝ、まぎるゝ事もあるを、中々に、あさはかとや、思はすらんかし。水無月の七日は、園の神の御まつりとて、大路せく、人立ち集へり。物見べき心地もあらねど、よろぼひ出給ふにつきて、遠近しありきて、ある物なきど、見せたらむに、笑み榮ゆつゝ、めづらむを。いな、世にしもあらで、今日、こゝに、いかで、まう出こん。はだし

ならぬ事の口をしと、獨言つゝ、此のきら〳〵しく、まばゆき様々の事も、目覺しからで、人のいつき子の、いたいけしたるを見、あき物の、なつかしう造り立てしをも見ては、これ得させたらむにはなど、さゝゆぎきこゆるを、とくより、然こそ思へ。今は、物も見じ。色香とて、人のめではやすは、我が爲の鬼の集くにぞありけるとて、宿にと急がせ給ふみ心のいとはしさ、云はん方なく、御後見する身も、共に、涙をのみまゐらす。いと、いふかひなしや、

忘れんとおもふ心のなか〳〵に
　見るがまさるゝ憂にこそあれ

かくばかり忍ぶこゝろをさなきが
　あらで戀ふらんことのかなしさ

もろ共ならで、何しにとゞまれる身ぞと、又、打ちなかるゝには、この照る日にも、まと〳〵に乾ぬ袖なるを見て、都の友が[illegible]達の宣ひつるは、さる歎きのみこりつむよし原に、待人とてもなきを、何いざきて去りなん。今まむしなりとも、月を、嵯峨野、大くらの江にながめ、紅葉を、北山のくま〳〵にかざせかし。生駒峯、高くとも、すこしはれ〳〵しきを、比叡のみ雪もみすてや。いづくも〳〵、草の枕のかりそめふしにはと、慰め給ひぬるいさめの哀と、み心の止まるにもあらねど、よしや、繋がぬ舟は、風のまに〳〵とてなん、白雲のあはだの山の麓に、膝二は入るまじきとりして、なにすよの、明しくらすにも、流石に、見きくことどものめづらしきは、あしかる事のみに、

なれにし難波ゐなかの、賤がひが心になむ

跋

いつのいとまにか、斯るはかなごとして、打ちおき給へりしを、物の中より捜り出でたる悲しさよ。破りすてんは、忘れんとする一の心なり。しかすとも、あに忘れんやは。とても、かくても、捨てられし身の、生べき命かはとてなん、露わけ衣の昔ぐつとともに、書改めて、獨のみある庵住に、

山郭公、涙をそふる社、憂が中なるうき事にとあれど云ふことを、なき人にかたりつゝ、青海原、はてなく、おもひつゞくる物狂はしさよ

つらかりしこの年月のむくいして
　いかにせよとか我をすてけん

寛政つちのえうまのとしきさらぎそれの日昔の人にかはりて書きよめはへる

余斎

花ふゞき

その十五

塩井雨江

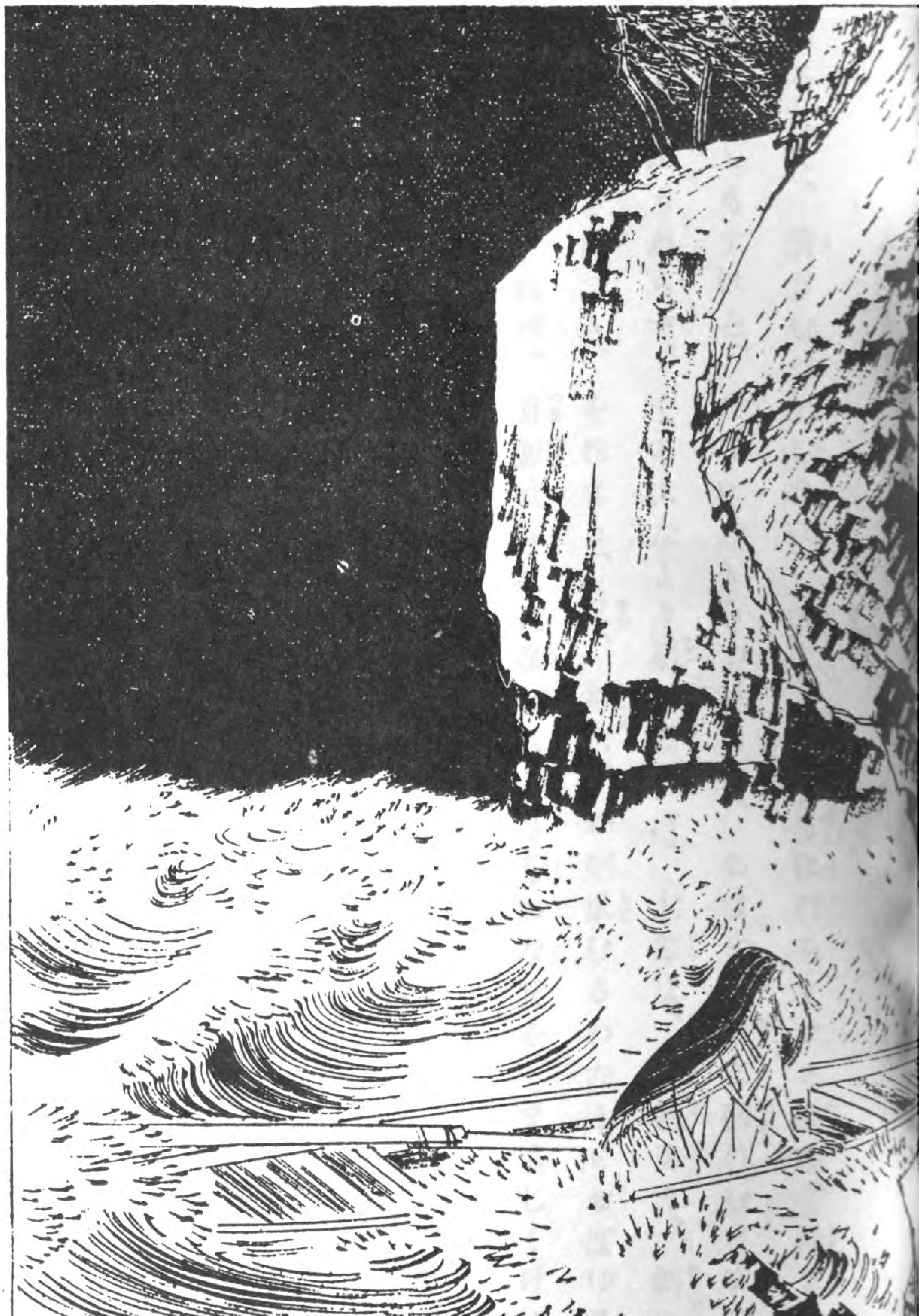
賤機が、梓弓のよくよく張りつめたる矢竹心、引きとゞめても、今は、とゞむべきけしきなく、頻にはやり立ちて、有井の邸を志して、駈りゆきたる後をた、御息所

は去バし、途方に暮れたる御氣色にて、うちながめ給ひしが、怺へ難くや成り給ひけむ。あな、あぶなや、賤機、汝れのみ獨を、いかでかはと、俄に立ちあがり給ひて、後をバ追はむと、去たまふ。

七郎は、あなやと留め奉り、さては、いよ〳〵事の、あぶなくなり候はむ。賤機どの丶御事なれバ、さすがに、思慮なき道には、よも出で立ち給ふ事なからむ。ともかくにも、わが合圖を待ちねとさへ、遺し行かれたる事なれど、あながちに、後後の慮の無きにも候はずと覺え候へバ、賤機どのが敎へ置かれしわたりまで、潛に御舟を寄せまゐらせむ。さても、また、七郎とても、空しく舟べりに取りつきて、始終徒に待たむとは思ひ候はず、御舟寄せての後にこそ、又、兎角のせんすべも候はめ。君が上、賤機どの丶御事、悪しかれとは思ひ奉らぬ七郎が志に、なほ暫時、御運をまかせ給へと、頻に慰め、頻に勵まし奉り、かけたる綱をひきときて、岸をはなれ、けふ覺え置きたる三郎が屋敷の裏手なる崖の下まで、漕ぎ寄らむと、朧月夜の闇に櫂の音を忍むせて、漕ぎ出でたり。

磯をつたひて、めぐらむとするに、岩は大く小く、三々五々、亂れて、彼方此方に兀





兀と突出でたるだに、漕ぎむづかしきに、沖よりまともに打ちよする波の、横さまに船をたゝき、やゝもすれど、岩はにたゝきつけられ、あはや微塵に破れむとすれど、危き事いふばかりあらず。やるにたより惡しければ、七郎は、餘義なく、斜に幾町か、沖の方に漕ぎ出でゝ、それより、又、斜に、わが求むるわたりとおぼゆる崖を、へむけて漕ぎよすれば、月影はおぼろながら、うちわたせど、まさしくけふ見おぼえたる御坐所の裏手なる磯の邊なり。

此處も、又大岩小岩蒔き散らしたるやうにて、は浪へ波、頻に峻しけれど、七郎は、右にさけ左にやり、むつ岩むらの間をくゞり、よせかへす荒波の隙を越え、辛うじて漕ぎは寄せたれど、舟を繋ぐべき木も草もなく、底は小石まぢりの沙地なれど、櫂を立つる事もやくなく、去かも、月は猶豫なくかくれて、はやおぼろの光だに、とどめずなれるを、如何にせむ。七郎は、繩を片手に下り立ちて、水に去たりつゝ、其處邊かいたづね、漸に岸なる岩かどの便を得て、舟を繋ぎたるは、賤機がのぼりたる屏風なす厓に、ほど近きわたりなりけり。

御息所は、始終心賴なげにて、御舟のはつるや、七郎を見そなはして、のう七郎、あ

まりに汝を煩はす事の、心苦しき限りなれど、汝ならで、賴みとおもふ者もなき身を、あはれと思ひてや。賤機の事の、あまりに心にかゝるなり。汝の便きかむまでは、必かくて、親らは待たむに、願ふは、今より直ちに有井の邸へ忍びて、賤機が爲に、一臂の力を添へて、まさかの難義を救ひくれよ、志は忘れじと、仰せ給へど、七郎は畏りて、あな勿體なき事な、仰せ給ひそ。わが身まゐれど、賤機どのゝ御事は、み心安くおはせかし。唯、賤機どのが、かばかりに思ひ定めながら、なほ思ひ殘され、かたく賴みきこえ給ひたる君がよそ、暫時なりとも、離れまゐらすは、七郎が心に似ざれど、させでは又叶はぬ危急なるをいかにせむ。とあれかくあれ、今一度は、取りて歸へらではやまぬ七郎が所存、わが身再度あらむまでは、かへすぐ〃おん心を捨てさせ給へ、よしなきものな思ひ給ひそ。さらずも、賤機どのはいはずも、七郎もまた、お恨みまゐらせむと、申し上ぐれば、ものな案じそ。必待ちなむ。賤機七郎伴はれては、何處へ何時か、一人ゆくべきと、仰せ給ふ。

きらむ吉相待たせ給へといひざま、岸に踊り上り、賤機がのぼりたりとおなじ列なる屛風岩ながら、此所はやゝ高く低く、岩はの面に、凹凸あるを賴りに、七郎、踊

り上り踊りあがり、神か、鬼か、更に人事ならぬ早業に、容易く頂上にうちのぼりたるは、賤機が憤怒の勢、さながら風雷の落ちかゝるばかりすさまじく、有井の屋形を踏み轟かして、奮戦勇闘する最中なれば、遥なれど、唯ならぬもの音は、狂風怒濤に答へて物すごし。

あな遅れたるかと、七郎は築地の方によると見る間に、一間斗りなるを、一飛びに飛び越え、一二町ばかり、松林を潜り抜け、垣を三度ばかり越ゆれば、賤機が忍び入りたる宮の御坐所近く出でたり。音はいよ〳〵烈しく、のゝしる聲、あはす太刀音、今は定かにそれときこゆれど、七郎は、いよ〳〵やすからぬ思にせき立ちて、椽にかけ上り、此方彼方伺ひ見れど、賤機の破りたるならむ、戸の引き放ちたるあるを、これ屈竟と踊り入り、太刀音する方を志して、決河漲流狂ひに〳〵て討ちいれば、さばかりやさしき賤機が、夜叉王の荒れたる如き勢もて、輕我すぞ、邪魔すな、三郎を出せや、とく出せや、君父の仇ぞ、出さずやと、頻にさけびつゝ、短刀を打ち振り〳〵、疾風亂雲の宙を飛び、暴虎狂狼の地を馳り、千變萬化の術をつくして、奮闘するさま、勇ましくも、花々しくも、又危き事いふばかりなし。あな賤

機どの、あぶなや、七郎御助立と呼はりざま、どつと叫びてをどり入りたり。

文林

春のゆふべ山里をとふ　近衛忠熙

山里のゆふべをとへどうぐひすも
人くとつげてねぐらにぞ鳴く　毛利元徳

山里をとひ來てみれどはるもなほ
ゆふべ淋しきいりあひのかね　東久世通禧

くれにけり花より花にたづね來て
かへるさとほき春のやまさと　鍋島直大

ゆふがすみたなびきこめし山里の
花をたづねてけふも來にけり　前田利嗣

來て見れどさくら花さく山ざとの
春のゆふべぞのどけかりける　松浦詮

ぬしえらぬ柴折戸まも立ちぞよる
ゆふ山ざくら見すてがたさに　長岡護美

ゆふがすみ立ちへだてたる山里に

しるべ嬉しくうめかをるなり　　高崎　正風

道のべの花にうかれてたよりせし
山さくら戸はくれてこそ訪へ　　前田　利鬯

ぬししらぬ門をたゝくも深山路の
花見がへりのすさびなりけり　　水野　忠敬

うちかすむ春のゆふべを面しろみ
かたりくらせり山かげのいほ　　宮地　巖夫

花をいづる月おもしろし山さとの
春はゆふべぞとふべかりける　　小出　粲

わらびとり出でしあるじを待程に
やまざくら戸ぞ月になりぬる　　坂　正臣

やまかげの庵のあるじは知らね共
宿りてはなのあさしめり見ん　　植松　有經

かへるべき時をすごしぬ山さとの
花の木かげにひとよあかさん　　内藤　存守

山里のつき見んものをゆふまぐれ
とひ來し家はかすみ籠めたる　　大口　鯛二

さしてこし家にもいらで先ぞ見ん
このやまさとの花のゆふばえ

千葉　胤明

山里にこよひやどらんこゝろにて
をりくらしけり春のさわらび

業平朝臣のかた

大畑　弘國

鳥の名にみやこをかけて隅田がは
旅ねはるけきむかしをぞ思ふ

和田　正雅

たび衣はる〴〵きてしつまにこそ
君にみやびをかさねても見め

藤井行麻呂

むかし人あづまくだりに見し跡も
世にわりはらの名に殘りけり

三輪　義方

春曙

花よりもにほひはふかし山ざはに
むらさき立てるあけぼのゝ雲

松本　道別

捨子

捨てられし身ともしらじな幼兒の
母をたづねてねをのみぞなく

鍋島　榮子

春のゆふべ山里をとふ

夕まぐれ山邊のいほを訪ひくれば
みやこにしらぬ山ぞにほへる

蜂須賀隨子

月花のにほひをこむるゆふかすみ
わけつゝ訪はん春のやまざと

前田　朗子

つく〴〵し摘みて計らずとひて鳧
ゆふべのどけき春のやまさと

小池　道子

夕月のかげふみながらさくらさく
かた山さとをたづねきにけり
北島以登子

夕かすみたなびきこめて山さとは
家居もはなも見えわかぬかな
松平健子

夕まぐれ梅のかをりをとめ來れば
山したかげのいほりなりけり
中島歌子

くるゝにはまだはやからん山里の
垣根わたりのはなや見てこん
安東菊子

菜花

なにならぬ鈴菜のはなも花かめに
ふりよくさせば面しろきかな

佐々木高綱　阿部優子

ものゝふも八十宇治川をわたるより
うき世の波は越えうかりけん

待子規　師岡須賀子

雲と見しさくらは散りしやまの端に
こゝろのかゝるほとゝぎす哉

松を愛づる辭　落合爲誠

松こそめでたきものなれ。常盤の色の緑濃くて、葉を重ね、枝を交し、千代萬代に榮え〳〵て、限り知られず。幹は、天を衝き、根は、地よひろごりて、其の樣、たゞ、蛟龍の躍り、鳳凰の翔らむやうなり。月の宿るほど、雪の積るころは、取分けて、人の目に立てど、言はずもあるべし。藻塩

燒く烟の、磯邊の松にたなびきたる、岫を出づる雲の、尾上の松にかゝりたる、いとおもしろくて、いづれを兄、いづれを弟とかせむ。まして、風の吹誘ひて、謖々たる響あるは、かきならす琴の音にさへ通ふをや。そも〳〵、此の松よ。なべて、人のもてはやす名所といふ名所は更なり。山々浦々のはてまでも、必、蔭を占めたれバ、或は、天つをとめの、衣ぬぎてかけし事もあり。或は、唐土の皇帝の、雨を避けて立寄りし例もあり。貝拾ふ海女も、薪伐る樵夫も、おろそかにやはする。さても、花のにほやかなる、紅葉のうるはしきは、とり〳〵に、眺かはりて、心ゆく限りなれども、霜置く晨、杜鵑啼く夕には、殘りなう散りはてて、唯、物思ひの種となるぞ口惜しき。實に、松は、にほやかならず、うるはしからざれども、二葉のはじめより、鶴の巢ごもる後までも、常盤の色は、つゆかはらずして、いみじき節操の程さへ見ゆれバ、花、紅葉の外にめでらるゝも、うべなりや。かたかりの物を、おのれ等が、拙き筆にてものするは、をこがましき業なれど、橋本褧齋翁の、古にも稀なる七十の齡を祝はんとてにぞある。あはれ、翁は、此上なう、松を愛づる人にて、老いて、ます〳〵、すこやかなれバ、末の松山、末かけて、猶、此の後も、御代の榮と共に、幾久しうおはしまさむ。

人の慾心

龜井ふく子

世の中に、鬼神をおそろしきものといひ、豺狼を

こはきものとはいへど、そも、なか〳〵に、人の心の欲といふもの、いみじきにくらべなば、恐るべきものゝ歟かは。藤原の鎌足公が御すゑ、しかも、基經公の御子にて、萬上の至尊を輔け奉り、天が下の政治を取り行ひ、世にときめき給ひたる時平の左大臣殿、もし、正しき道にそむかでありなば、今も、猶、めでたく、やんごとなき人と取りはやされておはさむものを、彼の菅公の才學廣く、世のほまれ高かりけるを、かくては、いつか、おのれの位をも奪ひ、はては、子孫の繁昌をも妨ぐべきものならんと、思ひにくむ事、大方ならず、遂に、なきものになさんとの、あさましき非常の心起りて、罪もなき人を、構へて、罪におとすなどせられしものから、安かれと思ひしおのが一生は、なか〳〵に、なるかみのはかなき音にすら魂の身に添はぬばかりの心地せられ、長くもがなと頼みたる壽命も、叶はで、いと短きほどに、世を去り給ひ、いや廣くさかえよと祈りたるおのが末葉の人々も、ひきつゞきひきつゞき、枯るゝべき秋にもあらで、はやもかれ、散るべき風も吹かなくに、いつしか、もろくちりゆきて、あはれや、遂に、枝もたえ、根も朽ちて、殘らずなりぬ。又、つづきては、源の頼朝公、かの人も、己が覇業をぞ、他には奪はれまじ、我が子孫にのみ、長くつがんなど、あまりに思ひかけたる慾心より、いつしか、非道の道にまよひ入り、我がかなしき弟をも殺し、婿をもきりなどしたるものから、最愛の女子をだ、一生悲嘆の淵に沈ませたるのみならず、

脩禪寺の暮鐘聲悲しきも、孤甥の死を救はむ叔父もなく、鶴が岡の狂風、遂に、源門は、影さへとどめず、六十餘州の追捕使の實權、空しく、北條の手に落ちさりにしも、非道の慾心ゆゑならずやは。又、足利の尊氏こそは、强慾非道の限りならめ。彼れは、かしこくも、帝王より、御名の一字をも賜はりて、しかも、征夷大將軍といふやんごとなき役さへ賜はりて、御醍醐の、世に二なきばかりなりしものを、猶、あかず思ひて、天が下をも覆し、おのれ、自、覇王ともなりなましものと、不人の望を抱き、遂に、萬上の至尊を凌ぎ、忠臣孝子を、數多殺し、惡運、しばしは、盛をきはめ、室町の風色、華美を盡くしたれど、あはれむべし、逆賊不臣の罪名は、遂に、掩ふ能はず。數百年の後、なほ、其の像を取り出でゝ、首を斬りはなたれ、三條の河原にさらされ、或は、ふみにじりさへせられけるとか、心地よき事や。かゝるためしは、古に、今に、いと多かり。一々に取りいでゝ、あげたらんには、洛陽とやらむの紙數を盡くすとも、書きつくせずなむ。かゝる人々は、强て、名譽を得まく欲し、富貴を求めまほしく思ふものから、反りて、くやしきそしりを取り、あさましき罪を犯し、かぎりなき汚名を殘したるものなり。何事も、おのづからにまかせてこそ、世は安くも、人はたふとくもあるなれ。龍ならぬ身の、雲にのぼらんと思ひ、羽なき身の、靑空を飛ばんと思ひたればとて、何かかなはむ。唯、よしなき過に迷はむのみ。たま〳〵、輕氣球の如き器械にすがり

て、高くのぼりたりとも、いつまでか、造りしもの〻、おはれでやわるべき。遂には、谷のはざまにおちてくだけ、青海原の底にしづみて、藻屑となり、はては、いづれも、末はおぼつかなからん。和氣の清麿公とて、おのれ、富貴を求むる慾心つよく、道鏡にへつらひて、古よりの皇室のやんごとなきをも忘れなむ、いかでか、末はるかなる今日まで、臣の鏡とて、美しき名の殘るべきかは。楠の正行の朝臣も、一度身を保ち、家を安んせん事を思ひて、父が櫻井に遺して散りたる遺言、わだになすことあらざりたらむには、いかでか、忠孝兩全の士と、たぐひなくつたはるべしやは。

雜報

●皇后陛下　廣島の行宮におはしまし〻　皇后陛下には、天皇陛下の、去にし四月二十七日、京都に行幸あらせたまひし御先發として、おなじ二十六日に、京都に行啓あらせたまへり。京都の人士の、こを迎へまつるさまの、いと賑々しく、いと、おごそかなりしは、いふまでもなく、御途々にて、送り迎へまつりしさまの、いと、盛大なりしは、たとへん方なかりきとぞ。

●うるはしき姉弟　望ましき學の庭に、うるはしき衣きて、足とき車夫におくり迎へられ、讀む

嘗、用うる品に、あまりありて、何ひとつ足らぬものなき良家の子女は、ともすれど、學のわざををこたり、かしこき教をおろそかにするが多かり。さるに、貧しき家にうまれて、何事も足らぬがちのみかは、物學ぶべき暇さへなきを、姉弟のもの、よくはかりて、學のわざをいそしみ勵みしは、いかに愛でたきことならずや。これぞ、河内國枚方町大字伊賀の松江駒吉の長女わさ(十二年)長男定吉(十一年)の二人なりける。父の駒吉は、家いと貧しくて、二人の子女を、學の庭にかよはすべき力なきを、母なる人、まことに、心がけよき人にて、さまぐに、心をくだきて、夫にはかり、苦しき中より、二人を、枚方尋常小學校にぞかよはせける、姉弟のものは、このたらちねの厚き恵をよろこびて、いさゝかの間もあだに過さず、日毎に通ひて、ひたすら、勉めはげみしが、かく、二人とも、兩親の、忙はしくおはすをもかへり見で、學の庭へのみ通ひては、さぞかし、事繁きに堪へたまはじと、姉弟言ひあはせて、姉の、學の庭に行く日は、弟は休みて、家のことをたすけ、そのあけの日は、弟のみ行きて、姉は、家に殘り、何くれと、手だすけをなし、夜になれば、已が習ひ來りしことゞも、かたみに教へ合ひけり。かゝりけれど、去る三月三十一日には、姉弟とも、同じく、尋常小學科を卒へて、めでたく、證書授與の式場に臨むことを得たり、こを見たる甲乙、はめ合ぬはなく、ことに、郡長某ぬしは、いたくはめたゝへ、町長某ぬしは、二人のものに、金一

圓づゝ、賞與したりきとぞ。人の子たるものゝ、みな、かくあるべきはもとよりにて、人の母たるものも、亦、かならず、かくあらざるべからずなん。

●三輪田眞佐子刀自　この頃、刀自をおとづれまゐらせたるに、思ひきや、やまひの床にうち臥しておはしぬ。さればぞ、こたびの女鑑に、女子處世論のつゞきをおくりこされぬなりける。ただし、さしたることにはあらずと聞けば、この次よりは、また、つぎ／＼送りこさるゝならん。また、刀自、病の床にありて詠みたるなりとて、左の歌一首、から歌二首を示されたり。

をりにふれて

風をいたみ逆まく浪のうつしほに
　千鳥ともよぶ夜半のさむけさ

病中偶成

伏レ枕蕭然感有レ餘　紛紜世議近何如
病來謝レ客幽窓底　一縷風煙遶二藥爐一

柳陰遊駒

長堤十里柳陰清　誰氏遊駒嘶二晩晴一
知汝沙場追レ虜日　鐵蹄一蹴駭二千兵一

●志篤き婦人　府下淺草區橋場町の塩田さん子といふ婦人は、かねて、麹町區内に住ひし因ありとて、こたび、麹町區より出でゝ、征清の軍にしたがへる人々百三十四人に對し、一人につき、金三十錢づゝのわりあひにて、合せて、四十圓二十錢の金を、麹町公民會といふに差しいだし、それ／＼、その遺族に分配したまひてよと、いと懇なる書して、頼みきこえたるより、公民會にて

は、たゞちに、その手續をなしたりとぞ。まことに、篤き志の婦人といふべくなん。

●生番の結婚式　臺灣島の土人は、熟番、及、生番の二種にして、熟番は、稍、支那風に化したるも、生番は、全く、支那を敵とし、支那人とさへ見れバ、屠殺する風習なるが、今、生番の風俗中に、最、面白きは、其の結婚式なりとて、或人の物語るを聞きしに、男兒、壯年に至りて、一女を娶らんとするに際しては、先、其の女子の住居を訪ひて、其の門前に立ちて、一種の樂器（竹製單純の笛）を吹奏す、若、女子にして、好匹として、心を許す折は、內に在りて應奏し、合奏一番の後、男子を誘ひて、室內に入れ、自、父母兄弟に引合はせ、相共に、饗應歡待、至らぬところなく、終に、合卺の禮を擧ぐるとぞ。勿論、女子にして、合奏せずバ、此の緣談は、纏らずと知るべし。

（日本）

●貴婦人會　同會總會公爵夫人毛利安子氏は第二回寄贈品として、一名に就き磁針器一箇、手巾一筋づゝ、合計、磁針器一萬二千本、綿手巾同前を、此頃、海兵恤兵部へ寄贈ありし。

●將校婦人會　偕行社將校婦人會にては、菓子四百七十五袋を、近ごろ仙臺陸軍豫備病院へ寄贈せり。

●金圓寄附　日本橋區、常盤學校高等科女生徒一同は、金二圓を、本鄕區、西片町十番地、京都府士族、中川まき子は、金五十錢を、安房國、安房郡、山本村、平民、小原みね子は、金三十圓を、

右何れも近日東京盲啞學校へ寄附せられたり。

●女子職業學校　同校にて製造せし造花、及、刺繍等は、早に海外へも輸送して、頗、賞讃を受たれども、元教育的供需のため製造することと迚、一時多數の注文に應ずることは六ヶ敷事情とありしが、併し今後は少數なる比例に、一層注意して、尚高尚なるものを製出せんと、目下頻りに工夫計畫中なりとかや。

●村上夫人　村上徳島縣知事の夫人ます子（四十）は、熊本縣の人にして、夙に篤行の譽ありたるが、征清事件に付、婦人の身ながら、爭で報效の微意を致し度きものと種々考慮の末、遂に看護婦となるに心を定め、客月下旬廣島に到り、陸軍豫備病院に就て、妾、元來、看護の事に慣はねバ、如何なる仕事にても、出來得る事を爲さしめ給へとて、懇請の末、遂に其許しを受け、爾來、板の間の拭掃除、病衣の洗濯等、如何なる穢はしきことも、更に厭ふ氣色なく、熱心に從事し居られしかど、他の看護婦も自ら勵まされて、一層職務に勉勵するに至れりとぞなむ、さて夫人の三男某氏も、曩に戰地に赴きたき一念より、竊に軍夫となりて渡航し、糧食其他の運搬に從事して、毫も不平の色あらざりしを、西郷伯爵傳聞して、且感じ、且傷み、過般金州兵站部の某官に薦擧せりとかや、母子一對稀有の美談、實に双璧といひてまし。

●岩崎ゆく子　廣島陸軍豫備病院第三分院といへるは、軍人罹病者中、傳染病のみを入院せしむる所なれバ、流石看護を以て職とする婦人も、大

方は、此院に送らるゝを厭ふことなるに、赤十字社京都支部にて養成せられし看護婦、丹波國桑田郡曾我井村字寺岩崎房次郎長女ゆく子（十九）は、昨年十一月以來、該院詰を命せられて、少しも忌避する模樣なく、數月の久しき、恰かも一日の如くに勉め居る中、不幸腸窒扶斯に感染し、哀れや未だ妙齡の身を以て、去月廿五日、遂に職務の爲めに斃れしこと、惜みても尚餘りあり、同院にては、父、房次郎を呼寄せ、淸水理事より、ゆく子病死の次第を傳へ、且、親子の情、さこそ悲しくも思ふらんが、其死たる、軍人の死と均しく、殊に傳染病の看護なれども、恰か身、戰鬪線內に在るに同じく、實に邦家の爲め、其職に斃れたるものなり、之を思はゞ、ゆく子の死は、寧ろ喜ぶべく、歎くべからずと、諭されしに、房次郎は、はふり落る涙を拂ひ、拙者も、其元は、國主の御用金をも調達して、聊か御國の爲めにも相成たるものなるに、物變り、星移りて、今は漸々村の助役に選まれたる位、今回の事に就ても、是といふ功績も得擧げず、子は七八人あれども、皆幼少にて、兵役にも服する能はず、日頃遺憾に思ひ居たるに、幸ひに娘一人、看護婦ながら、御役にも立ちたりとありて、聊か拙者の願ひも叶ひぬ、決して未練はござりませぬと、喜び勇みて引取りしが、泣かぬ親の心中は、泣くにも勝して哀れに覺えしと、折から居合せたる人の消息ものして報來しぬ。

●阿部春子　　青森縣玉造郡温泉村字赤湯近傍に、一の老人ありて、年八十に餘り、良家の生な

らバ、赤頭巾にても冠り、孫、曾孫、玄孫に、おぢいさん／＼と、大切に尊めらるべき年配なるに、哀れや此の老人は、二人の子さへあるにも拘らず、今日は、此處の野、明日は、彼の山と、老の心を砕きつゝ、萌え出づる若草の芽を摘み取りては、己が身の養ひの料に充て、日一日として休うことなく、其處此處とあさりあるく身の上を、見もし、聞もしては、例も滿眼に涙を浮べる一婦人あり、此の婦人、或日道に老人に逢て、若干の黄白を與へ、尚かくかくと、ゆうにやさしう慰めて、立去れりしが、これ今までに、幾回となく人に憐をかけたる同縣下桃生郡十五濱村、阿部春子となむ呼ぶ人なりとぞ。

●般鑑　山梨縣、北巨摩郡、武川筋の某小學敎員は、此程、校長某が校用を帶びて、郡衙に出頭したる留守に、男女生徒一同を引率して、同郡日野春村へ、遠足運動と出掛け、凡そ四時頃まで、同村に滯在して、歸路は、方向を轉じて、七里岩中の難所と知られたる「野猿返し」とて、聞くも恐ろしき假橋を渡らんと試みたり、元來此の假橋は、細き松の丸太二三本を渡したるのみにて、渡りて中央に至れバ、一尺餘も上下に動搖するゆゑ、二十歲以上の者すら、容易に渡ること能はざる危險の構造なるが、好奇心と、名譽心とに富たる小國民等は、何かは以て猶豫すべき、男生の四年生、卒先して之を渡れバ、續いて三年二年の生徒も、我劣らじと無難に渡りしが、一年生の過半は、各慄ひ上りて尻込みするもの多きを、敎員は、夢中

になり、進め〳〵と、號令を掛け、之をも漸く無事に渡過せしめたり、然るに殿りに殘されたるは、女生徒にて、一同孰れも血の氣を失ひ、互に顔見合せて、誰れ一人進むものなきにぞ、教員之を見て大に叱咤し、鴨緑江の假橋を渡ると思へも何程のことやある、婦女子とは云ひながら、日本に生れし甲斐も無き腰拔の尼どもかな、尻引からげ、勇氣を鼓して、渡れ、進めと、鞭を揮つて號令を掛くれバ、流石の女生徒も、今は是までとや思ひけん、死を決して渡らんと言ど、猶戰慄して進み得ず、兎角する中、眞壁てるといふ十二歳の少女、教員の叱咤と、歸宅の時間に迫るゝ憂さに、他生徒の先登をなして、匍匐ふが如く、怖々ながら渡り初めしに、向ふ河岸にて、眺め居たる、男生中の惡少年等、此は、面白しと、中程迄渡りし所、橋を動搖せしむるや、唯さへ、一尺餘も、上下に動搖する假橋なれバ、何かは以て堪るべき、少女は忽ち搖落されて、ザンブと斗り、水烟りを立てゝ、急流の中に顛落し、アレヨ〳〵と云ふ間に、逆浪に捲かれて、浮つ沈みつ、一丁餘も押流されたり、之には流石の教員も、男生徒も、一時呆然として詮術も知らざりしが、四年生なる新富村の山田菜と云ふ生徒、衣服を脱捨て、眞裸になりて河中に飛込み、拔手を切つて、息も絶々に流れ行くてるに泳ぎ附き、漸く岸上に引揚げしが、早や息も通はずなり居りしに、一同再び驚き、種種介抱を加へければ、漸く蘇生したるにより、稍安堵の思を爲し、之を野猿返しの下なる農家に托

し、他の生徒を引連れて歸校したり、然るにてるの家にては、夜に入りても愛女の歸宅せざるを心配し、人を賴み、學校に行きて校番に樣子を聞しむるに、一同二時間も前に歸校せりとのことに、愈よ不審を抱き、其より他生徒の所に行きて尋ね、初て遭難の顚末を聞きて仰天し、早速野猿返しの農家に行きし處、多量の水を飲みし爲、容体甚だ宜しからず、依て猶介抱を加へたる上、辛くして連歸りしとは、何ぼう危險の話にてそ。

●年廼舍歌會　四月十九日のは左の如しとぞ

當座競點

鈴木重嶺先生撰

春興

天　増山三雪子

野にやまにあそびつくしてすかのねの
ながきはる日もあかれさりけり
鈴木　重信

地

水くきの岡の屋かたのつく〴〵し
つめどもつきぬ春のたのしさ
渡邊須磨子

人

花とりの色音のほかにすみれつみ
のべのすさびのおもしろきかな

○

ちりてうく櫻のはなは水のおもに
こてふをのするいかだなりけり
前田　利聲

かすむ野ははなもひさこもひらきけり
春のなさけにゑひてかへらむ
井上　正直

さわらひはこにあまれども家つとに
花をもそへてかへるたのしさ
増山　正治

山さくらかりくらしても春の日の
　あまるやをかのわらひをらまし
江刺　恒久

てふならて花の木かげにまふむかり
　ふくへのさけに我ゑひにけり
佐々木古信

うかれいてゝあそびしけふのつとにせん
　ふもとのすみれ峯のさわらび
梅村　宣雄

色も香もはなもよし野に來てみれむ
　いとたけをさへひとのしらぶる
青木　修

はなもさきわらひももえぬけふはまつ
　山にやゆかむ野にやあそむん
佐々木信綱

野にやまにこしのひさごを友として
　おいもつゑひく春のこのころ
櫻井　尚保

つまなつみ小魚つりにとさとの子が
　くるゝもしらてあそぶ野べかな
勝田　肇子

ながきひもなほあきたらぬこゝちして
　花の木かげにあそぶたのしさ
永瀬曾餘子

たけ馬にのりてあそびしともひとゝ
　うちつれ花をみるぞたのしき
千野　千艸

うぐひすも道しるべゑてやまさくら
　わけてたのしきはるのこのごろ
諏訪　忠誠

もえいでしつくゑさわらひとりくに
　とるもたのしき春の野べかな
諏訪　晴子

うぐひすの聲をきゝつゝはるやまに
　わらびをるこそたのしかりけり
會主　諏訪　忠元

教の庭

四月二十日兼題　水邊山吹

天

筏士もこゝろしてさせゆくみづに
かげこそ見ゆれ岸のやまぶき
　東京市築地二丁目　磯部つや子

地

枝しげみ下行くみづもわかぬまで
咲きあまりたるやまぶきの花
　長野縣東筑摩郡鹽尻村　河野文子

人

おもふこといはねもゆかし山吹の
花のこゝろをみづにうつして
　岩手縣氣仙郡盛町　高橋千代子

人

ながれ行く水もひとつに匂ふなり
岸のやまぶき咲きのさかりは
　伊豫國松山市唐人町三丁目　永井良子

（天地人の外は原稿到着順なり）

かはづ鳴く玉しま河に來て見れど
口なしいろのやまぶき咲けり
　佳山せの子

あめそゝぐゐ手の玉河みづまして
きしの山ぶき散りそめにけり
　安井章子

川きしに咲きてにほへり七重八重
こがねの色のやまぶきのはな
　小野田信子

水きよき池のみぎはに見ゆるかな
今をさかりのやまぶきのはな
　海島定子

うちそよぐ風にみだれて散る時は
こがねと見ゆる山ぶきのはな
　海島信子

春さめにみかさまさりて吉野かは
にほひもふかき岸のやまぶき
　永井さい子

みなかみの花はながれて行く春を
きしにとゞめてにほふ山ぶき
　羽田三緒子

ゆくみづにきしの山吹かげとめて
　河田いし子

はるせきとむる花のしがらみ

かはづ啼く井出の川瀬に陰見えて　內田慶子
咲き初めにけり山ぶきのはな

わたし守つかふ水竿もこゝろせよ　內田雲子
きしの山ぶきはなさかりなり

行くみづにかげはながれて山吹の　甲斐莊優子
花は咲きけり井手のたまがは

くちなしの八重山吹なきて見れバ　武藤いね子
かはつ啼くなり井手の玉かは

大井川きよきながれにかげ留めて　佳山幾子
今をさかりに咲けるやまぶき

蛙啼く野路の小かはを來て見れバ　植木鋼子
八重山ぶきの香ににほひつゝ

たにかはの岩井の清水くみに來て　伊藤敏子
かげより見つる山ぶきのはな

行く水のそこにうつろふ影の上に　勝家かをる子
散りてながるゝやまぶきの花

駒とめしわたりやいつこ玉かはの　內田てる子
八重やまぶきに言やとはまし

さくら花うつりし水にいろかへて　館脇萬壽子
見ゆるよし野の岸のやまぶき

よしの川うきたつ波にゆくはるの　諸井くら子
なごりを見せてにほふ山ぶき

枝たわみ清水ながれにかげ見えて　池永菊子
にほひこぼるゝ山ぶきのはな

おく露も黄金のいろににほふなり　吾妻ちか子
かはつ啼くなる井ての山ぶき

池水もこかねのいろに見ゆるなり　松浦糸子
きしの山ぶき咲き初めしより

たび路行く人もとまりぬおほゐ川　藤澤もと子
岸のやまぶきにほふさかりは

山吹のはなのいろ香のうつれゝぞ　高橋政子
ながるゝ水もこかねなりけり

ゆく水のいろかはるまで山ぶきは　名取正代子
いまこそ花のさかりなりけれ

たまかはやおろす筏もにほふらん　木下本子
きしの山ぶき咲きのさかりは

やまふきのかげをうつして芳野川　木下鈴子

なみのわやおる風のまに〳〵

水きはなる八重の山吹さきしより
池のさゞなみいろぞかはれる　龜井しげ子

谷かはの下行くみづにかげとめて
かをり流るゝやまぶきのはな　三原　照子

やまぶきの花の下行くかはみつぞ
こかねの色に見えわたりけり　久松とく子

風わたる小川のみつにえたひちて
波にゆらるゝやまぶきのはな　久松せい子

春さめの晴るゝ澤邊に八重ひとへ
香もなつかしき山ぶきのはな　久保田りつ子

筏士やこゝろしてさせよしのがは
ふれなバちらんきしの山ぶき　上村たか子

うちよせて黄金のいろに散る波は
岸のやまぶきうつるなりけり　青木はる子

みづそこにうつれる影を花と見て
君ゆむつるゝやまぶきのはな　吉田　芳子

やまぶきの花の露そふこのごろは
むすぶもうれしにはの池みづ　高野　辰子

かはづ啼く聲をたづねて行く岸に
思はず見つるやまぶきのはな　太田　貞子

はるさめにゝはの池水にごれども
岸のやまぶきいろ増さりけり　吉川　勝子

山さはの岸のいは間のやまぶきは
うつれるかげも黄金なりけり　根岸　英子

さゞれ波よする小川のみづにその
かげも黄金にゝほふやまぶき　木村　兼子

黄金いろに岸のやまぶき咲く時は
人のわしまでとゞめけるかな　中島　房子

やまかはの岸の山ぶき咲くときは
水もこがねのいろに見えけり　青木　敏子

池のおもの水のそこまで黄金なる
色を見せたるやまぶきのはな　近藤　季子

おもひつゝ言はぬいろをバ川水に
うつすも床しきしのやまぶき　遠藤ちか子

かはづなく井出の玉川はるふけて
きしの山ぶきいまさかりなり　荒川　靖子

ながれゆく水底ふかくにほふなり　瀧口　秀子

岸のやまぶきかげをとめつゝ

をしみてもとまらぬ春を流れ行く　荒井　波子
水にうつして咲けるやまぶき

ふる雨にいとゞ黄金のいろまして　松原　常子
つゆおもげにも咲ける山ぶき

かはづ鳴く聲かしましき我が夜の　澤田　俊子
池のきし邊にやまぶきのはな

蛙なくこゝろを知るべに來て見れど　神田　錦子
水にうつれるやまぶきのはな

得も言はぬ思ひの色を水にうつし　浦島　猶子
うるはしきまで咲ける山ぶき

池の邊に今さかりなるやまぶきは　水島　民子
黄がね色にてみつを見せつる

黄金なる色さへふかくいけみつの　野田千代子
おもふにうつる岸のやまぶき

さとかはの水にうつろふ山ぶきの　楠　精子
はなは今こそさかりなりけれ

わがやどの池のかはづも聲立てつ　島田　好子
八重やまぶきの花のさかりは

枝たれて水にうつれるやまぶきの　溝口　信子
花のいろかもわすれかたかる

蛙鳴くいけのみぎはにくちなしの　西村登羅子
花にも似たるやまぶきのはな

やまぶきの花咲きしより芳野かは　宮地琴與子
水もこがねのいろに見えけり

ながれ行く春とゞめまし吉野がは　師岡千代子
きしの山ぶきしがらみにして

かげうつる庭のさゞれも口なしに　千賀しげ子
匂ふと見ゆるきしのやまぶき

うちなびく影はうつりて浪立たぬ　南　淑子
井出の川邊のやまぶきのはな

こゝろしてそてさし入れよ行春の　富士野安香子
井せきに匂ふやまぶきのはな

四月二十日兼題　女子の衛生

藤澤もと子

凡そ世に注意を要する事とも多きそが中にも女子の衛生はどいとも至要なる事はなかるべし如何と

なれど國の强弱は其國民身體の强弱に關し其國民を養育するものは專女子の任なれどなりそも〳〵人の世に立ち事を處し或は目的を偉業に注ぎ以て公益を計らんとて孜々勉勵すとも身體强壯ならずバ其目的を達する能はずして中途空しく廢するにいたるべし固より人には强弱の差あれども襁褓の時より衛生に注意して養育せバ弱も亦久うして强となすを得べし我國古來女子の衛生に注意するもの少なかりしは一大欠點たるを免れず今や世の文明に進み各國と交際するに隨ひては愈女子衛生の忽にすへからさること明らかなりかしこくも我がきさいの宮は大御心を民草にそゝがせ給ふ中にも衛生の事に至りてはいみじく思召給ひて妾等野末の草葉も大御めぐみの露にうるはひぬこたびこまますらをらの連戰連勝彼をして降伏するに至らしめしはひとへに我が　天皇陛下の太御稜威と我が將士の精練勇猛なるとによるといへども亦身體强壯なるにあらざるよりは能く久しく艱難に堪へんや嗚呼我が日の本の女子たるものよいよ〳〵すすみて衛生の學を究めいよ〳〵强壯なる國民を育成せらん事を切に望むになん

太田　貞子

千ふみ八千ふみふみは讀めども身すこやかならねバ尙文見えぬ山かつが身こそうらやましかるべけれ黃金白がね玉なす家のきはみも身すこやかならずど尙つま木こる賤が身の上こそ長閑かるべけれ春は隅田の花見秋は栂尾の紅葉がりもさることながら尙身すこやかならねど花の香紅葉の色も只あはれの種とのみなりなんされバ世に病のうきせはかりうれたく衛生のわざバかり重きはあらずかし朝夕たゆまず窓ふかくとぢこもりて運動といふことせずぞうれひも多からん身きよからずぞ心のわづらひも出づらん暑さ寒さの時につけ心を用ゐざらはうき淵瀨にもおちいらんあくこともまらで物むさぼらぞ身のわざはひも起らんかしわけて女は人のつまともなり母ともなるものにしあれぞ其身のうれひはおのが上のみならで子のゆく末にも家

さかえにも及ばす事になんわはれ世の女子だちよ
たけき心はたけき身に宿りをゝしき子はをゝしき親
より出づといふなる心をバゆめ忘れで朝夕衛生の
道に心を用ゐてよ

五月五日兼題　竹亭夏來

天　東京市淺草區森下町　山本いと子

世にうとき竹の庵もこのごろは
　若バになつの色ぞ見えける

地　東京市　安井章子

風そよぐ音もすゞしくおぼゆなり
　夏きにけらしまどのたかむら

人　千葉縣佐倉町　植木鋼子

うちそよぐ軒のくれ竹つゆおりて
　朝かせすゞしなつや來ぬらん

しげりあふ軒の竹の葉吹くかせの　名取正代子
　いとこゝちよき夏は來にけり

花咲かぬ竹のはかせもなつくれた　佳山せの子
　かはらぬいろにおさ風ぞ吹く

（天地人のほかは原稿到着順なり）

夏去れときのふのはるはくれ竹の　佳山縫子
　葉かせ涼しくおさかせぞ吹く

吹くかせの音をもまたでくれ竹の　羽田三緒子
　葉わけの月になつを知るかな

くれ竹のしげれる宿もなつ來ぬと　河田いし子
　かすまぬ月のかげにこそ知れ

竹の子も夏を知らせてはひ出でぬ　佐々有隣子
　わが小竹そのゝ軒のみぎりに

すく／＼と軒バにはひしわが竹の　永井さい子
　みどりひたしき夏は來にけり

春過ぎて夏は來にけり今年はひの　青水春子
　竹のわか葉にすゞかせの吹く

しげりあふ竹の若葉にかせ見えて　河野文子
　のきバすゞしき夏は來にけり

文みなぶまどのくれ竹うちそよぎ
たもと涼しきなつは來にけり　吾妻ちか子

いほ近き竹のしげみに吹きかよふ
風もすゞしくなつは來にけり　舘脇ます子

風わたるまどの若たけそよ〳〵と
おとづれ初めて夏は來にけり　松浦糸子

あづまやのほとりに立てる若竹の
風もすゞしくなつは來にけり　池永菊子

涼しくもまどの若たけ吹くかぜに
なびくを見れど夏は來ぬらし　諸井くら子

わがやどの窓のくれ竹はひしげり
かぜの涼しきなつは來にけり　伊賀直子

賤が家の竹のしげみをふくかぜの
おとこゝ地よき夏は來にけり　磯部つや子

のき近くうえし若竹しげりあひて
窓なつかしきなつは來にけり　太田貞子

ことし子の竹も軒端に生ひ立ちて
風をたよりのなつは來にけり　髙野辰子

いつの間に夏は來にけり我が宿の
軒端のたけのかぜぞすゞしき　村田愛子

夏の來てにはの竹むら吹くかぜは
すゞしきふしの始めなるらん　村田喜代子

我が宿の竹のはやしも生ひそひて
風なつかしきなつは來にけり　村田美都留子

わがたけのまき葉涼しく露見えて
竹のそのふになつは來にけり　大海原芳子

五月五日兼題　端午の文

佐々有隣子

今日は端午の節句とて足引の山かたまける軍人も内日刺都の空もとり〳〵軒ばにはききねながら菖蒲ふきわたし門の内には旗さし立て床の上にはおやめ太刀鎧など家のむき〳〵にかざりたてたるは征清の皇軍をことさら祝ひて御代の行末ながく子孫の八十連屬大きみの御たてとならんことを千代萬代かけて父母の祝ひたまふなるべし男兒の太刀かき鉾ゆけ竹馬に打のりて御世を守の心の柱ふとくをゝしくつきたてんことをつとめいそしむ姿は

いともゆかしく末たのもしくなん

太田　貞子

せちといふ事は數多あれども五月にしくはなし軒毎にくさぐさの旗手靡かせ幟などとりつくろひたる平らけき御代にも尙軍といふこと忘れぬ姿なるべしさうぶ蓬などふさやかにふきなしたるに朝風のさと吹き渡りて葉末の露のこぼれ合ひたるいと涼しく薫りも一入ますす心地ぞするやさうぶのさし楡藥玉などいふ事ぐさも今は大方絶えにしが尙帶にた挾み頭にかざしてわざはひ拂ひなどいひありくもかたく束なるわざながらなは古へ忘れぬ心がらいみじうゆかしさうぶの湯などあみて寝ねたる夕べ殊に臥し心地のよろしきもことと折りには似ずいとすか〳〵し大方かゝる敢果なき遊びも皆ゆかしく昔し覺ゆるわざならぬはなきなといつしか下つ世になるまに〳〵斯かる片田舍にのみなれるぞいとも口惜しき

兼題

五月廿日
歌……薄暮松風
文……幼稚園を觀る記

六月五日
歌……聞水鷄
文……春日局

御恩ます〱高深なることを知らむ。之を知らばいよ〱孝養を盡さずして可ならむや。

小澤蘆庵

家富みてあかぬ事なくつかふとも報いむものか親のめぐみは

一首の意は、己の家如何に富み榮えて、萬事萬端父母の意に協はぬことなく、不足なることなく、朝夕孝養を盡くして、死し給ふまで事へまつりても、父母の恩は高大無邊なるものなれば、報い盡くし得るものにあらず。されど子たるものは、心力を擧げて、出來る限の孝養を盡さゞるべからずとなり。

父母に孝を盡くすことは、美味なる食物、温暖なる衣服を奉ずることは、勿論なれども、其の心を養ふを第一とす。富有にさへあれど、美味美服は如何樣にも出來得るものなれども、其の心を養ふことは、金錢もてなし得ることに非ず。假令貧賤にして疎食疎服なりとも、其の心を養ふことを得ば、是より大なる孝行はあらずかし。而して其の心を養ふには、愛と敬との二つを以てせざるべからず。愛とは、衣食は云ふも更なり。親を二つなきものに思ひ、誠心を以て事へまつり、朝

夕其の安否を問ひ、夏は枕席を冷にし、冬は臥床を温にし、常に顔色を和げ、命あれば、直に之に應じ、聊も不滿の聲色をなさず、常にあい〳〵として、父母の意に背かぬ樣にし、父母も我を見給ふ時は、直に喜悦を催し、鬱悒も散じて、愉快を感じ給ふ樣に萬事を執り行ひ、心を用ゐるを云ふ。敬とは、敬ひ尊びて、決して疎畧にせぬを云ふ。世の人、愛を以て仕ふるは多けれども、敬を盡すもの少し。口腹の愛は、犬馬も猶之を能くすれども、敬なき時は、犬馬と同じことなるべし。此の愛敬の二つは、孝の尤も要所なれども、決して一を欠くべからず。又身體髮膚を毀傷せざるも、其の心を養ふ一なり。身體髮膚は、父母の遺體なれば、之を毀傷するは、即父母を毀傷するに同じ。故に禮儀を正しくし、身を謹み行を省みて、我が身を大切にせざるべからず。然る時は、父母も其の心を安んじて、甚しく其の子の身の上を心配し給はぬ樣になるなり。又父母は、疾を、尤、憂へ給ふものなれど、養生を怠らずして、疾病などに罹らぬ樣にすべし。其の外、夫婦睦じく、兄弟姉妹相親しみ、一家團欒して和氣藹々たるは、父母の心を安むるに、尤、大切なるのみならず、一家も是より盛榮に赴くものなり。家内の者皆別々の

心になり、互に猜疑欺罔して、不平常に止まらざる時は、如何に富貴なる家と雖も、是より零落して滅亡に歸するは、今更喋々を俟たざるべし。故に職を勵み業を務め、名を擧げ家を興こし、父母の名を顯はすは、孝の終と云へり。前にも云へる如く、父母の恩は、實に高大無邊にして、際限あるものにあらざれど、此の如き位にては、中々孝を盡くし終りたるものには非ざれども、苟も子たるものにして、右に擧げたるものを、一つとして欠くことなく、皆之を盡して、殘す處なからむには、先は子たる道を盡くしたるものと云ふべきなり。

康資王母

人の子の親になりてぞ吾が親の恩はいとゞ思ひしらるゝ

一首の意は、末子にてありしほどは、親の恩も是ほどまでとは、思ひ知らざりしに、吾みづから子を設けて、親となりて後に、始めて親の子を思ふ心の一方ならざることは思ひ知らるゝものぞとなり。

諺にも、子をもちて始めて親の恩は知ると云へる如く、吾が末子を設けずして、父母の膝下にある間は、其の恩の萬分の一をも知らざるものなり。父母の子を生育

するには、實に言葉にも文にも、云ふに云はれず、盡くすに盡くされざる劬勞ありて、容易ならざるものなり。其は吾が子を設けて後始めて思ひ知るべし。さる大恩のある父母に對して、親の子を生育するは義務なりなど、あらぬ理屈を唱へて、親を親とも思はず、恩を恩とも思はざるは、實に不孝の極とや云ふべからむ。

鶴若丸

やゝ積る我が身の年を思ふにも先たらちねの老ぞ悲しき

たらちねとは、母のことを云へども、兩親にかけて見るべし。一首の意は、漸々に年月が經行きて、我が身に年の積るを思ふにつけても、先第一に、我が年を重ぬるだけ、親も年を重ねて、老人になり、衰へ行き給ふことが悲しきことなりとなり。

年月に關守なく、猛き川のみなぎりながるゝが如く、速に經行きて、年々歳々に、小兒は成壯となり、壯若は老人となり行く世の習ひ、如何ともせむすべなし。されど、退いて考ふれば、吾が慈愛なる父母は、年々歳々に老衰し給ひ、思ふ心の萬の一つも、御恩を報ゆることも能はずして終りなんとす。一念此に及べば、如何

なる人なりとも、悲哀の情切なるべし。吾が身に積る年も悲しけれど、父母のことを思ひ起こしたらむには、寔に肝も心も、身に添ぬは心地やせむ。鶴若丸が、年月の身に積るより、父母の事を思ひ起こして、悲しまるゝ孝心は、實に至り極まれるものなれバ、この歌を見るにつけても、其の平生の孝養こそ思ひやらるれ。人はかくぞあらまほしき。

丈部黑當

父母も花にもがもや草枕旅は行くともさゝげて行かむ

花にもがもやとは、花にてもあれがしと云ふことにて、がもやは希望の意なり。○草枕は、旅の枕詞にて、歌の意には關係なし。○一首の意は、旅に出立する時、父母を伴ひて行くことも出來ねど、何卒、父母を花にもなしたきものなり。若し花になして成るものならバ、旅の艱難辛苦なる道は行くとも、父母には少しも難儀若勞をかけずして、手を以て頭の上に花を捧ぐる樣に、父母を捧げ持ちて行くべし。さすれど慈愛なる父母に別れずして、同じ道に行くことを得ていとも〱樂しき事ならむとの意なり。

古は今日の如く、萬事備らざる世の中なりし故に、旅は殊に困難なりしなり。故に草枕とて、行き暮れたる野山に宿り、草を引き結びて枕とせし位なり、されば、唯獨にて行くさへ甚しき艱苦なりけれど、まして父母を伴ふことなどは、思もよらず。さりとて必要なる要事、或は朝廷の命令などによりては、止を得ず別れがたき父母にも別れて、旅立せざるべからず。孝心深きものは、如何に悲しかりし事ならん。されば、若父母が花にてもありしならば、捧げてなりとも、旅に行かむと思ふ情愛の切なることも、實にさもありなん。今の世は、何事も便利なれば父母を伴ふにも差支はなけれど、又何時にても、之を伴ふことを得るものにあらざるべし。すべて父母に孝を盡さんと欲せど、父母ましますす時は、遠く遊ばすといへる古人の教の如く、常に膝下にあるべきなれども、おのづから遠く旅に出で立つべき場合なきにしもあらず。或は、家業の爲、或は修業の爲、或は官命の爲など是なり。此は父母の膝下を離れて、孝を欠く如くなれども、實はさにあらず。一朝事を終へ錦を着て歸る時は、父母の悦譬ふるに物もなき程なれど、返りて孝行となるものなり。然るに、今の世には、父母の意に背き。諫をも顧みず、遠く笈を

負ひて遊學し、父母を欺き、本意にも違ひて、遊怠放逸に身を持ち崩し、錦を着て歸ることを得ざるのみならず、故郷に歸ることさへも得ざる樣にはふれ行く人の多きは何ぞや。此は皆父母の恩を忘却したる結果なり。既に恩を忘却するさへ、甚しき不孝なるに、まして父母を欺き、金錢などを徒費して、返りて父母に心配を增さしむる罪、何とかいはん、人は此の歌をだに服膺して、旅に出でたらんには、家業にもあれ、修業にもあれ、官命にもあれ、如何でか成就することを得ざらむ。

丈部稻麿

父母が頭かきなで幸くあれと云ひし言葉ぞ忘れかねつる

一首の意は、吾が旅に出立するに際し、父母が頭をかきなでゝ、何事もなく、無事にして、其の事を成就して歸り來るべしと、呉々も云はれし言葉は、朝夕忘れかねて、常に服膺して居るとなり。

子の旅中にある時、父母の第一の心配は、疾病なり。事の成就も、如何に〱と心配し給ふものなれども、疾病より甚しくはあらず。此は膝下に居る時も、さる

事なれど、別けて遠く離れたる時は、一しはなるものなり。されバ、父母を故郷に殘して、遠く旅中にあるものは、其の心せずして可ならむや。然るに、世には、故郷を出立する時に、父母の無事に成業して、錦を着て歸れと、呉々も云はれし詞を忘れはてゝ、成業は云ふも更なり。攝生を怠りて、父母の本意に背くもの徃徃あり。不孝のものと云ふべし。

藤原道信朝臣

限あれは今日ぬぎすてつ藤衣果なきものは涙なりけり

藤衣とは、父母の喪中に着る服なり。藤の葛を少く折きて、織りたる衣なり。○一首の意は、不幸にして、慈愛なる父母の死し給ひぬれバ、涙ながらに藤衣を着て居たれども、此の喪服の藤衣を着て居る間も限ありて、今日にて終りたれバ、脱ぎすてゝ外の衣服と改めたり。されども、父母に別れし悲しさは、少しも變ることなく、今日になりても、矢張死に別れし當座の樣に悲しくして、其の時と同じ樣に、涙はこぼれて止まらず。實に此の悲バかりは、盡くる時なけれど、涙も矢張盡くる時なく、果しもなく落つることであるとなり。

世に悲しきことは、種々あれども、父母に別れたるより、悲しきはなかるべし。一度三寸の息絶え、心臓の活動止まる時は、慈しき聲を聞くこと能はず。愛しき目を見ること能はず、呼べども答へ給はず。叫べども應へ給はず。家の内は、恰も火の消えたるが如く、闇の夜に迷へるが如し。實に悲しき極點なるべし。されども、事此に至りては、如何にも、詮方なし。なき跡の弔を始として、父母の着ならし給ひし衣服手ならし給ひし種々の道具を見るにつけても、皆涙の種となりて、實に果敢なきものは涙なるべし、平生孝養を怠り、不孝を働きしもの、此に至りて、如何に後悔悲嘆すとも、何の詮かあらむ。されば、父母の强健にまします間に、心力を擧げて、孝養を盡し、出來るだけの報恩を致さゞるべからざるなり

前大納言爲氏

ありし世の親の諫のまゝならば悔しく身をば嘆かざらまし

一首の意は、親のまし〳〵し世に、種々の諫を受けたれども、其を守らずして、心の儘に振舞ひたれど、今になりて、思ひ當る事のみ多し。若し親の諫のまゝに從ひまつりて、萬事を行ひ來りしならんには、今日になりて、後悔をして、吾と我

が身を嘆く樣の事はあらぬなるべし。親の諫を用ゐざりしが爲、今日かゝる目に逢ひて、親の罰を蒙るならんとの意なり。

此は此の歌を詠みし爲氏卿にも限らず、父母の死して、我が身を後悔悲嘆するものは世にいと多かるべし。世には、父母を恨み怒るものあれども、其は決して父母の惡しきには非ず。子たるものが善からぬなり。父母は、我が子なれば、恩愛の情も他にまさりて、甚しきは、押しなべての世の習なり。如何に無慈悲なる親と雖も、我が子の惡しくなれと希望するものあらむや。勞力をも厭はず、恥辱をも忍び、世に諂ひ、人に讓りて、勤勉する親の心は、子のかはゆければなり。若し、子なくして、我が身一つならんには、世に望深くもなく、心にもあらぬ苦勞をするものはなかるべし。故に人の親たるものは、貴賤貧富によらず、心の目的は、常に子の方に向へり。已が食を省き、已が衣を脱き、饑寒を凌ぎても、子には饑寒を與へざらんとす。是親の情なり。違へば直し、惡しければ諫め、さりとも聞かざらん時は、非常なる折檻をしても、之を正しき人とせむとせり。蚊蚤にも食はせぬ樣に愛して、成長させたる子を、打ち懲らして、心に快とし樂しとする

もの世にあらんや。其の之を行ふは、止を得ずしてすることにて、實は子のかはゆければなり。されど、さる非常なる折檻などを行ふ親の心になりたらんには、如何ばかり悲しきことならむ。是を思はずして、己の惡しきことは少しも顧みず、返りて親を恨み怒るものは、實に不孝の上の不孝なり。左樣なるものは、父母の死し給ひて後にこそ、いたく悔悟悲嘆をなすべけれ。其は父母のまします間には、左程にも思はねど、なき跡に至りて、父母の恩は思ひ知るものなればなり。世の子たるものは、兼ねて此に注意して、後悔せぬ樣になすべきなり。

僧正遍昭

たらちめはかゝれとてしもぬばたまの我が黑髮を撫でずやありけむ

たらちめは、母のことなり。○ぬばたまとは、黑の枕詞にて、歌の意には關係せず、○一首の意は、我が慈愛なる母が、我を生み給ひて、成長せしめ給ひし時、朝夕に我が黑髮をかき撫でゝ居給ひし時は、我が成長して後、今の姿の如く、あさましくなれとては、かき撫で給はざりけむを、今は斯樣なる姿になりて、なき母に對し、實に面目もなき次第なりとなり。

凡、人の一方ならぬ劬勞をして、子を養育する所以のものは、成長の後に希望あれバなり。善くも惡しくも、子の心のまゝになれと思ひて、劬勞する親は、世に一人もなかるべし。されバ、子たるものは、各其の親の心に從ひて、職業を勵み勉むるこそ、孝行の第一なれ。然るに、世には、親は左にせよと敎ふるを聞かずして、右にせむとし、右にせよと命ずるを背きて、左にせむとするものあり。是大なる誤なり。さる人は、大方、世に處して一身を保つこと能はずして、あらぬ姿に零落するものなり。されバ、人は親の敎のまゝに從ひて、なき親に顏を合はしても恥ぢざる樣にせむことを、常に心がくべきなり。

讀人知らず

難波人あしびたくやはすしたれどおのが妻こそとこめづらしき

あしびとは、葦を以て、燒く火のことなり。○すしたれどとは、煤けたれどにて、葦の火を燒き、久しくなる時は、家屋の中、其の烟にて甚しく煤くるものなり。○とこめづらしきとは、いつまでも珍らしくして、かはゆしと云ふことなり。○一首の意は、難波江に住みて、葦を火に燒き、家屋甚しく煤くるまで夫婦となり

て、貧苦にはあれど、己が妻は、少しもあくことなく、いつ見ても〳〵、かはゆらしく珍らしきものなりと云ふことにて、夫婦の間は、正にかくぞあるべき。夫婦は、人の大倫なり。尤大切にせざるべからず。夫婦にして和合せざる時は、一家治まらず。一家治まらざる時は、一郷亂れ、遂に一國にも及ぶものなり。故に小にしては、父母の不孝となり、大にしては、君に不忠となる。而して、夫婦は、常に一室の間に起臥するものなれど、其の間互ひに狎れ易し。狎るれば侮るは人情の免れざる所にて、夫婦の和合を失ふは、實に此にあるなり。故に夫は妻を愛し、妻は夫に事へ、互に相侮る心を生せざる樣にすべし。すべて夫は外事を掌り、婦は內事を掌り、內外の事相合して、一家は齊ひ行くものなり。若し、夫、如何に外事を勤勉して收入を殖すも、婦、內事を怠りて徒に之を費消せば、一家は必衰ふ。又、婦、如何に內事を儉約して徒費を省くも、夫、外事を勉めずば一家は必滅ぶ。故に、必夫婦內外相和し相應せざれば、一家の繁榮は、得て期すべからず。時に或は、夫、婦を助け、婦も亦、夫に力を添へざる事あるも、牝鷄の晨するは、是家の盡くるなりとも云へば、婦は夫を指しおきて、何事も振舞ふ樣

のことは、成るべくなすべからず。婦の夫に先だちて、事を左右する時は、夫の威厳を損し、人に愚弄せられて、遂には不幸に陥るものなり。然るに、世にはかかる事を能くも考へで、己少し智恵ありとて、婦にして夫を越ねて威權を振舞ふものあり。箇様なるものは、偕老同穴の契を全くする能はずして、中途に離別し、或は一家を顚覆せしむるに至ること必せり。故に夫婦は、互に愛情を濃にして、此の歌の如く、何時見ても珍らしくかはいくある様にしたらんには、人の大倫を全くするのみならず、一家をも盛にするに至りぬべし。

身人部王

大伴のみつの濱なる忘れ貝家なる妹を忘れて思へや

一首の意は、大伴のみつの濱には、忘れ貝とて、心に思ふ事を、すべて忘ると云ふ名を付きたる貝のあるが、其の貝の名の様に、家にある我が最愛の妻を忘るゝことなく、朝夕に戀ひしく思ふことであるよとなり。妹とは、妻のことを云ふ。夫婦は、其の間の親密、尤深きものなれば、同じ室に居住する間は、云ふも更なり。一朝止を得ずして、遠く相離るゝこともあるも、夫は婦を忘るゝことなく、婦

拜啓益御盛大奉賀候引續き御引立を蒙り辱く深謝仕候陳は會計主任者氏名及使用印形供貴覽候間將來は乍御手數金錢御受拂の事は勿論會計上の御用は必下名の者へ御宛被成下度且金錢出納は左の印形を以て本社の證と御認め被成下度此段得御意候草々敬具

會計主任者

成澤唯次

明治二十八年三月

國光社圖書部

注意

今後本社ゟ宛てらるゝ御書面は御用向の模樣により夫々左の各部ゟ御宛て下され度候若さ候はずば混雜する恐ある哉も計り難く候

國光社編輯部 編輯一切に關する事柄

國光社會計部 金錢受渡に關する事柄

國光社圖書部 圖書雜誌に關する事柄

國光社印刷部 活版印刷に關する事柄

尙今後社用ゟ關する事柄に付直接に發行人編輯人印刷人等に御申越被下候事御斷申上候

女鑑

毎月二回五日廿日發行

定價壹冊金十錢
三ヶ月前金五十五錢
半ヶ年前金壹圓
但全國無遞送料
廣告料五號字廿三字詰一行金二十錢

明治二十八年五月四日印刷
同　年五月五日發行

東京京橋區築地二丁目二十一番地
發行兼印刷人　川崎直衞
同
編輯人　山根勇藏
同
發行所　國光社

（電話番號千九百四十六番）

（印刷所　東京國光社印刷部）

〔明治二十四年八月八日内務省許可〕
〔明治廿五年三月十二日遞信省認可〕